

月刊

ダンゲロス

2011
5



魔人10選「鏡子」 「鏡介」
希望崎学園祭 1st Day 架神恭介
希望崎学園祭 後夜祭 こう
はじめてのダンゲロス体験記 momoji
ダンゲロス・夏の海水浴編 架神恭介
第八次ダンゲロス・ハルマゲドン

戦闘破壊学園
ダンゲロス

2011年2月2日
講談社より発売!!

この先
DANGEROUS!
命の保証なし!

ダンゲロス
cagami kyosuke

第3回 講談社BOX新人賞
Talents受賞作

戦闘破壊学園
ダンゲロス
架神恭介
Illustration 左



この先、
DANGEROUS!
命の保証なし!!

そう、この魔人種子、一見するとあんなに可愛らしい子供だが、その実、組織的な作戦を備えた人を招いた魔人セラー。覚悟においておられるものなると言われたけど、その中のセラー、ピチキ、オア、ピッチ、である。おそろしく宇宙一セラーが巧い。



希望崎学園
新校則提案
希望崎学園
以下は
●非処女者
●廊下を走った者
●掃除をサボった者
●服装が乱れた者
●遅刻者
●レイプ犯罪 (加害者、被害者とも)

【著者】架神恭介 【イラスト】左
【価格】1785円(税込)
【ISBN】978-4-06-283759-0
【発行】講談社

「この先、DANGEROUS！ 命の保証なし！」

魔人どもの巣窟、私立希望崎学園——通称「戦闘破壊学園ダンゲロス」にて、生徒会・番長グループによる恐るべき最終戦争「ダンゲロス・ハルマゲドン」が幕を開ける——！

全身から異臭を放つ怪力ロリっ娘番長、邪賢王ヒロシマに相対するは、「学園総死刑化計画」を企む恐怖の生徒会長ト正義卓也！そして、両派の殲滅を目論み召喚された次元の旅人『転校生』。

性別転換能力者、両性院男女を中心に三者の思惑は乱りに乱れ、魔人能力は百花繚乱の様相を示す。愛と正義と変態性欲渦巻く混沌の戦場に、華開く一つの奇跡とは——。

全国書店にて好評発売中！！



目次

目次

- 1 表紙 (稲枝ケイジ)
- 2 目次
- 3 ダンゲロスとは
- 4 絶対に知っておきたい魔人10選「鏡子」「鏡介」
- 5 希望崎学園祭 1st Day (架神恭介)
- 6 希望崎学園祭後夜祭 (こう)
- 7 はじめてのダンゲロス体験記 (momoji)
- 8 夏の海水浴編 (架神恭介)
- 9 第八次ダンゲロス・ハルマゲドン

ダンゲロスとは

『戦闘破壊学園ダンゲロス』

・第三次ダンゲロス・ハルマゲドン ストーリー

小説家の菊地某によって創設された私立希望崎学園では、当然のように魔人たちが跋扈し、血で血を洗う不毛な戦いを繰り広げていた。

そして、生徒会とそれに敵対する番長グループの緊張状態は日に日に高まり、校長によるデタントの動きも空しく、ついに二大勢力の休戦協定は破棄され、ここに第三次ダンゲロス・ハルマゲドンが勃発したのである。

事態を憂慮した数学教師長谷部は、魔人どもの戦いに終止符を打つべく、異界から『転校生』を召喚する。転校生に与えられた使命は、生徒会、ならびに番長グループの殲滅であった。

- ・「戦闘破壊学園ダンゲロス」はインターネット上で行うアナログのオンラインゲームです。
- ・各プレイヤーは超常的な力を持つ「魔人」を一人一キャラクター創作し、「生徒会」「番長グループ」の陣営に分かれて戦います。
- ・ゲーム性は一言で言えば「自由に駒の作れる将棋」。魔人将棋とも呼ばれます。
- ・各魔人の特殊能力はイメージの赴くまま自由に作れます。ただし、強い能力ほど発動に成功する確率が下がります。
- ・各陣営とも約一週間の戦術会議を行い、ゲーム当日に互いの戦術を競い合わせます。
- ・一週間かけて仲間たちと練り上げた最強の戦術が見事に成功した瞬間、もしくは、相手の戦術の前に為す術もなく瓦解していく喜怒哀楽を楽しむ戦略シミュレーションゲームです。
- ・ゲームは不定期で開催されます。キャラクター募集が始まったら、きみも参加してみよう！いつも妄想しているキャラ設定や「おれのかんがえた特殊能力」を披露するチャンスだ！
- ・なお、ダンゲロスの公式設定は「魔人の持つ特殊能力とは『自己の認識を他者に強制する能力』」という一点のみです。世界観やキャラクターも自分の好きなように解釈できます。「そうだと思った人にとっては、それが公式設定」がダンゲロスです。これにより人のキャラクターや世界観を自由に改変して、小説、イラスト、ゲームなどの二次創作を誰でも作ることができます。商用・非商用は問いません。現在、ダンゲロスの二次創作小説として講談社から『戦闘破壊学園ダンゲロス』（著・架神恭介）が発売されています。
- ・ただし、自由度の高さの反面、これは自分のキャラクターが他人にいじられるということでもあります。自分のキャラクターにすごく愛着があり、誰にも触らせたくない！という人には参加をオススメできません。参加希望者は参加時に他者に二次創作されることを許諾する必要があります。

魔人とは

『魔人』

- ・魔人とは、人間の域を超えた身体能力や技術を持ち、また固有の超能力（特殊能力）を備えた存在です。
- ・彼らは生まれた時からそのような力を持っているわけではなく、何らかのきっかけによって魔人に覚醒します。

覚醒者の傾向

- ・日頃から妄想ばかりしている人や、目立ちたがり屋、「オレは他のヤツラとは違う特別な人間なんだ」と思い込んでいる人などが魔人になりやすく、幼児期や少年期、特に中学二年生頃は魔人覚醒の可能性が高くなります。そのため魔人の持つエネルギーのことを、専門家は「中二力（ちゅうにりょく）」と呼んでいます。
- ・幼児期の子供は、手からエネルギー波を出したりする漫画の主人公などに憧れることが多く、覚醒した場合は特殊能力も攻撃的なものとなる傾向にあります。一方、中学～高校生頃に覚醒した魔人は、男女を問わず性的な能力を得る者が出てきます。
- ・一般的な中学、高校では、1学年に2～3人の魔人が含まれます（治安の良い学校における不良の割合と同程度）。ただし、魔人は差別の対象になりうるため、特定の学校以外では自分が魔人であることを秘密にしておくのが普通です。
- ・自分の能力に無自覚であったり、その力の詳細を知らない者もあり、同年代の不特定の他者が作り出す集合的無意識によって魔人となるものもいとされています。
- ・また、ごく稀にはありますが、魔人として覚醒しやすい血統を持つ人間も存在します。

特殊能力

- ・魔人の持つ特殊能力とは、「自己の認識を他者に強制する能力」であり、もっと端的に言うならば、「自分の妄想を他人に強制する力」のことです（ゲーム的には「プレイヤーの妄想（した超能力）を他者（他プレイヤー/ゲームキーパー/ゲーム全体）に強制する」と考えて下さい）。
- ・魔人同士の戦いとは互いの妄想のぶつけあいには他なりません。
- ・特殊能力は魔人にとって自己のアイデンティティに等しいものです。そのため、思春期の魔人たちは「自分らしさ」を表現するために能力を行使しようとする傾向があり、理由なき暴力、理由なき殺人を行う魔人も珍しくはありません。
- ・そのため、魔人は社会的には犯罪予備軍として認識されており、周囲からは差別的な視線を送られています。
- ・魔人の突発的犯罪、すなわち、「キレル魔人」は社会問題となっており、老人などは「ワシらの若い頃は村ぐるみで魔人を教育しとったから、今の若い魔人のように凶悪犯罪を犯すことは

なかったんじゃ」などと言いますが、実際の魔人の犯罪率は以前に比べ減少傾向にあります。

差別

- ・ 魔人は差別の対象となることがあります。
- ・ そのため、理性的な者は自分が覚醒しても能力を見せびらかしたりはせず、ひた隠しにします（シークレット）。
- ・ ただし、そのような理性的な魔人は、調子に乗ってすぐに能力をひけらかす魔人に比べて中二力が弱く、能力や肉体の強さで他の魔人より劣る傾向にあります。

死ぬまで魔人

- ・ 覚醒した者はその後元に戻ることは無いため、若者だけでなく老年の魔人も多くいます。
- ・ 彼らは雇用差別や住居差別を受けることが多く、その鬱憤からやはり突発的犯罪を犯しがちです。犯罪者にならずとも、アル中になったり、ホームレスになったりする者も少なくありません。
- ・ 中には魔人の力を使って事業などに成功し、巨万の富や権力を得ている者もいますが、彼らは一般人から妬まれ、ユダヤ人や客家のように扱われます。
- ・ 魔人の覚醒には遺伝要因もあるらしく、成功した魔人の一族郎党が集まり、財閥のような形を取ることもあります。これら一族では子や孫が魔人へと覚醒することを厭わず、むしろ覚醒を促すような教育を施すケースもあり、「児童虐待ではないか？」と社会問題になっています。
- ・ また、スポーツをする者の中には、強い相手との出会いを繰り返すことで魔人としての力が飛躍的に増大するケースがあるようです。
- ・ なお、魔人の中には、大人になってから自分の特殊能力を「恥ずかしくて仕方ない」と思うようになる者もあり、場合によっては、鬱病や強迫神経症へと発展します。カウンセリングに行くと、「それもあなたの個性なのよ」と慰められます。
- ・ その一方で、「ウオオ、オレの能力マジかっけえ！」と、一生自分に酔い続けている魔人もおり、彼らは周囲の差別など屁とも思わず、一生、明るく楽しく楽天的に生きています。

魔人警察官

- ・ 警察も魔人を採用して、魔人の凶悪犯罪に対処しています。
- ・ 魔人警察官は、魔人が就職できる数少ない採用口であり、非常に倍率が高いです。
- ・ また、他の魔人に比べ、一般人から受ける差別も比較的少なくてすみます。その代わり、魔人警察官は他の魔人に対する差別感情が強く、犯罪を犯した魔人への取調べは苛烈を極め、しばしば社会問題となります。
- ・ 魔人警察官の他には魔人機動隊もあり、1970年代初頭、過激派魔人学生が起こした山荘立てこ

もり事件に出動したことで有名になりました。自衛隊にも魔人のみを集めて構成された魔人中隊があり、魔人の一個小隊は通常の大隊相当の戦力にあたると言われてています。

・なお、魔人自衛官は通常の二階級上の給与を得られますが、佐官へは昇進できません（魔人中隊の指揮官は一般人の一佐が務めます）。学園外での魔人の犯罪やテロ行為に対しては、これら魔人警察官等が対策に当たります。

治外法権地区

- ・学園内での犯罪に警察権力は介入できません。
- ・1960年代に活発化した魔人学生による学生運動の結果、1970年代初頭に「学園自治法」が制定されたためです。これにより、全国の小・中・高・大学は校則を唯一の法律とする治外法権特区となり、学園内の治安は自己責任となりました。
- ・学園側は魔人体育教師などを雇い学園の治安維持に努めましたが、魔人学生たちは番長グループを組織してこれに対抗。多くの学園では番長グループが勝利し、学園を暴力で支配したため、校則は形骸化しました。
- ・1990年以降は、全国の手付けられない魔人学生たちを私立希望崎学園他、いくつかの学園に集めることで、多くの学園の治安は回復して来ています。こういった魔人の受け入れを行う学校は、一般的に魔人学園と呼ばれます。
- ・しかし、それでも魔人の突発的な覚醒は防ぎようがなく、魔人学生による大量殺人は年に十数件報告され、ワイドショーなどで面白おかしく取り上げられています。
- ・なお、希望崎学園は魔人の占める割合が高いため、学園内での魔人への差別感情も少なく、治安はともかくとして魔人の精神衛生上はむしろ外部世界よりも良好です。

転校生

- ・転校生とは、何らかの条件により魔人から進化する突然変異体ですが、詳しい発生原因などは解明されていません。
- ・もともと持っていた魔人としての能力は消失し、代わりにまったく異なるロジックの能力を身に付けています。
- ・身体的にも、能力的にも魔人を凌駕する恐るべき存在です。
- ・彼らは契約によって召喚され、さまざまな次元を渡り歩きます。

本文：ダンゲロスwikiより転載 (<http://www34.atwiki.jp/hellowd/pages/117.html>)



●鏡子

性別：女

所持武器：鏡

攻撃力：0 防御力：0 体力：8 精神力：2 豊富な経験：20

特殊能力：『ぴちぴちビッチ』

鏡を通して全MAP上任意のマスへ自分の腕を出現させ、豊富な経験に基づく技を駆使し任意の一体を刺激し興奮させる。精神力ダメージ4ポイント。初期位置でしか使えず、能力発動後、移動不可。マスに一人の時しか使えない。能力を使用するたびに体力-2。

[発動率：87% 成功率：100%]

キャラクターの説明：

三つ編み眼鏡の気弱色白根暗無口。制服は校則通りの膝丈きっちり。眼鏡を外すと美人だとかそうでないとか。

初出は第三次ダンゲロス・ハルマゲドン。番長グループのスタメンとして出場した。

当初はビッチという側面はそれほど注目されていなかったが、第三次における『転校生』レイプ、さらに、その後の数々のキャンペーンにおいて取り沙汰されるうちに伝説のビッチと目されるようになり、「豊富な経験に基づく性技」程度であったスキルも「超人的・超常的な性技術」として認識されるようになる。

決定的な転機となったのは、Aマホダンゲロスのキャンペーン「鏡子先生のビッチ教室」において、製作者イトにより発せられた「鏡子は盛りのついた男子生徒40人を60分で処理できます」発言であろう。（今となっては考えられないことだが）当時のプレイヤーにとってこの情報は衝撃的であり、各自、鏡子の性技術に対する認識を大幅に上方修正することとなった。

結果、今では各プレイヤーの中で鏡子の性技術に対する認識は際限なく膨れ上がり、「クトゥルフをレイプした」「宇宙を射精させることも可能」など、およそ性行為において不可能はないとさえ思われている。もはや「盛りのついた男子生徒40人を60分で処理できる」と聞いても驚くプレイヤーは皆無であろう。鏡子の存在は、以降のダンゲロスのゲーム性を性的な方向に引っ張った最も大きな要因かもしれない。

「セックスは最強の格闘技」と称して路上格闘大会に出場し、ラスボスを1ターンで沈める（「ダンゲロス・ホーリーランド」）。地下闘技場でラスボスとして参戦し、他参加者を歯牙にもかけず一蹴する（「ダンゲロス最大トーナメント」）などの実績を持つ。なお、留年を繰り返した末に希望崎学園の保険医となった、という設定も初期にあったがいつの間にか忘れ去られた。

ところで、鏡子は「ビッチ」とされているが、これは本来のビッチの意味とは微妙に異なっており、どちらかと言えば「痴女」に近い。製作者のイトいわく、「あいつにビッチを名乗らせることは正確にいえば誤用にあたるであろうことは気付いていたけど、だってこんなことになるだなんてあのときはおもっちゃいなかったんだ」であるが、ダンゲロス界限においては、今でもビッチは「鏡子のような女性」という意味で理解されている。

最後に、「鏡子は卓越した性技術者でありながら処女」という設定を掲げる「鏡子処女派」が一部に存在することも記しておこう。

本文：架神恭介 (<http://www.pixiv.net/member.php?id=1149979>)

挿絵：es (<http://www.pixiv.net/member.php?id=75204>)

挿絵：稲枝ケイジ (<http://www.pixiv.net/member.php?id=50629>)

挿絵：みや (<http://www.pixiv.net/member.php?id=8973>)



●木下鏡介

所属：転校生 性別：男性 武器：無属性攻撃

攻撃力：20 防御力：15 体力：10 精神力：10 空間歪曲：10

特殊能力：『空間歪曲』

転校生の縦横3マスにいるキャラクターのうち、任意の一人を自分と同じマスへと召喚し、直ちに通常攻撃を加える（ただし壁には阻まれる）。なお、特殊能力の発動率、成功率共に100%であり、次のターンでお休みすることもない。

[発動率100% 成功率100%]

キャラクターの説明：召喚者の求めに応じ、異界から召喚される魔人。相応の報酬と引き換えに、召喚者の依頼に応じる。

初出は『第三次ダンゲロス・ハルマゲドン』。当キャンペーンにおいて転校生として登場した。しばらくの間は固有名は付けられず、ただ「転校生」と呼ばれており、その後、転校生に固有名が付くことが当たり前になると区別のため「無印転校生」などと呼ばれるようになったが、いつの間にか「木下鏡介」という固有名が与えられた。「鏡介」はこの頃に現れた「鏡子の血縁」設定によるもの。「木下」は「ダンゲロスif」において、月島弥生の胸を揉んだことに由来する（杉田尚のジャンプ漫画『斬』を参照のこと）

第三次において鏡介は、戦術的に圧倒的不利である生徒会にとっては最後の切り札、番長グループにとっては大なる脅威と目されていたが、実際のゲームでは登場直後に殴られて瀕死となり、そのままゲーム終盤まで放置。両陣営から冷笑された。番長グループの勝利が決定した後、プレイヤーからは「転校生がかわいそうになってきた」「殺すことは簡単だが、むしろ生かして帰してあげよう」「お土産に鏡子で抜いてあげようか」などという話が出てきて、結局、転校生は殴られて瀕死になった挙句、鏡子に股間をまさぐられておうちに帰ることとなった。これにより「転校生＝ヘタレ」という印象がプレイヤーの中で根付き、以降、凶悪転校生「野獣牛兵衛」の登場まで転校生が脅威と認識されることはなかった。

鏡介はその後もヘタレの代名詞として事あるごとに取り上げられ、プレイヤーキャラ、転校生として複数回登場。外伝やTRPGでの登場もしばしばで大抵はロクでもない目に遭っている。「鏡介」の表記が確定していない時に出てきた「木下恭介」「木下狂介」などの亜種もあり、「狂介（できる子）・鏡介（できない子）・恭介（ふつうの子）」などとされたりもする。ちなみに、鏡介の戦歴の一例を挙げると……、

【木下恭介】ダンゲロスKINGに登場。最強クラスの精神攻撃能力者と評されながらも、本戦では能力を使う間もなく吸血鬼にかみ殺されて即死亡し、その死体は太陽光によって塵と化した。

【200億人の木下鏡介】インフレダンゲロスに転校生として登場。このキャンペーンは周囲がインフレしまくっていたため、転校生でありながらまるで注目されず、本戦ではいつの間にか殴り殺されて死亡。

【木下狂介】ダンゲロス・サイバーダイブに転校生として登場。初代の能力に壁貫通がついた強化版であったが、登場するやいなや毒入りの焼きそばパンを喰らって即瀕死となり、そのままゲーム終了まで放置されるという、初代とほぼ同じ末路を辿った。

【木下アベンジ】ダンゲロス・禅&50にプレイヤーキャラとして登場。転校生化して登場するという強能力で試合前に注目を浴びたが、本戦では登場した瞬間、味方のしかけた爆弾に特攻して爆死した。

この通り、おそろしく不遇である。しかし、元々、木下鏡介はステータス的にも能力的にも優秀なため、ダンゲロスAJやダンゲロスTAGなどの個人戦で彼を選択するプレイヤーは少なくない。

なお、木下の「鏡子の血縁」設定はその後も進展を見せて、「鏡介は鏡子とド正義の曾孫」「100歳の鏡子と肉体関係にある」「将来の夢はひいおばあちゃんと結婚すること」「鏡子と同クラスの性技術者」などの設定が追加され、架神BOX版はこの設定に準拠している。

本文：架神恭介 (<http://www.pixiv.net/member.php?id=1149979>)

挿絵：大塚 零 (<http://www.pixiv.net/member.php?id=45874>)

挿絵：es (<http://www.pixiv.net/member.php?id=75204>)

挿絵：ε (<http://www6.atwiki.jp/infla-dange?>

[cmd=upload&act=open&pageid=33&file=infrakinosita.jpg](http://www6.atwiki.jp/infla-dange?cmd=upload&act=open&pageid=33&file=infrakinosita.jpg))

「希望崎学園生徒のみなさん……。お、落ち着いて聞いてください。先程、『転校生』の迎撃に向かった生徒会役員、並びに番長グループですが……。全滅した……との報告がありました。学園祭は中止します。落ち着いて避難し、『転校生』が立ち去り次第、速やかに下校して下さい。繰り返します。『転校生』の迎撃に向かった生徒会長と番長は——」

教室のスピーカーから、教師の震える声が響いて——、しかし、そこにいた生徒たちのどよめきはその声をかき消すばかりに肥大していく。絶望の音色を滲ませて。

「お、おい……。生徒会がって。まさか、ド正義会長がやられたってのか」

「範馬さんも、一刀両（いとり）ちゃんも……。番長の邪賢王（じゃけんおう）までもが、かよ……」

「も、もうおしまいよ！ あ、あたしたち、みんな、『転校生』に……」

「オイ、早まるな……。まだ『転校生』がオレたちを殺しに来たと決まったわけじゃない！」

「分かるもんか！ あいつらの目的がなんだろうと、オレたちを殺すなんてアイツらにとっちゃ造作もないんだぜ！」

芸術校舎、音楽室での一幕である——。突如現れた『転校生』。そして、彼らに惨殺された生徒会、番長グループ。この緊急事態に生徒たちは絶望の色濃く慌てふためいていた。だが、

「おい、両性院……」

「うん。まずいことになったね」

狂乱渦巻く教室の中で、逆に静かに言葉を交わしたのは両性院男女（りょうせいいんおとめ）。そして、その親友、川井ミツルであった。彼らは吹奏楽部の知り合いに頼まれ、音楽室での準備を手伝っていたが——、

「ミツル。とりあえず新校舎に戻ろう」

「そうだな、沙紀が心配だ。まずは合流した方がいい」

天音沙紀（あまねさき）——。両性院とミツルの幼馴染であり、昨年の文化祭ではミス・ダンゲロスに輝いた美少女である。

「まさかとは思いが——、『転校生』のやつら、沙紀を狙って来た可能性もあるよな」

「そうだね。でも、それより心配なのは……」

と、両性院が言いかけた、その時——。

彼の憂慮した異変は、まさにその目の前で生じ始めていたのだ。

「もうダメだわ」「みんな殺されるのよ！」などと呟いていた女生徒が、突如絶叫すると――、

がりがりがりがりがり。

猛烈な勢いで頭を搔きむしり始めたのだ！

彼女の両の爪は頭皮まで抉るほどに喰い込んで、黒髪は指の間から束になって抜け落ちていく。さらに女生徒は頭皮を驚掴むと――。

ぶちぶちぶちぶち――。

と、力任せに黒髪を引き抜いていく。

視線は虚ろに宙空を漂い、口元には微笑さえ浮かべながら――。

世にもおぞましき、狂気の如き光景であった。

「な、なな……、何を、やってるんだ……。一体……」

「クソッ、もう始まってしまったか！」

「知っているのか、男女！」

「見てろ、ミツル！ あれが、こうなってしまった者の末路だ――！」

恐怖に駆られた哀れな少女は、ついに中央部分のみを残して頭髪を全て薙り終わると、その一直線に残った頭髪を不意に逆立て、そして叫んだ——！

「ハッハー！！！」

さらにはどこからか取り出した謎のトゲ付き肩パッドを身に着け、手には鉄の棍棒を振りかざしたのである——！ そう、その姿は、まさに……、

「モ、モヒカンザコ……！」

ミツルは愕然とした様子でやっとこれだけを呟いた……。

「そう。モヒカンザコだ。ああなってしまってはもう手遅れだ」

「あ、あれが伝説の……。で、でも、どうして女の子がモヒカンザコに——！」

「ミツル——。震災現場や大火事の後に、現場でレイプが多発するという話は知ってるね？」

「あ、ああ……。危機敵状況にあって種の本能が遺伝子を残そうとして、性衝動が高まるって言うあれだろ……」

「そう……。でも、その程度は、まだ危険が少ない時のことだよ。本当の危機敵状況を前にした時、種の本能はどう対処するか——。生き残るためには手段を選ばず、あらゆる正義感を打ち捨て、恐怖を忘れて戦い、時には恥も省みず強者に媚を売り、無慈悲に弱者を虐げる。そうして、ただ食料と水を貪欲に追い求める——。荒廃した世界において、サバイバルに最適化された人類の最終形態。そう、それこそが——」

「モヒカンザコ——」

その時には、既に少女だけではなかった。周りの生徒の間にも次々とモヒカンザコ化は進み、みな、それぞれのモヒカンをおったててトゲ付き肩パッドを装備し始めている。そして、棍棒を振り上げ、口々に叫ぶのだ。「ハッハー！」「ハッハー！！」と。

「お、おい……。このままじゃ、『転校生』にやられる前に沙紀がモヒカンザコに襲われちゃう……」

「それもだけど……。沙紀自身がモヒカンザコになる可能性だってある。早く合流して彼女を安心させないと」

「い、急ごうぜ、男女……！」

二人は顔を見合わせ頷くと、直ちに走りだそうとした。
だが、その時である——。

「うウ——ッ！」

両性院男女が頭を抱え、その場にうずくまったのは。

「お、男女ッ——！」

「ク、クソッ！ まさか……。僕が、こんなに、早く……」

両性院男女は苦悶の表情を浮かべ、必死に何かに耐えようとしている。だが、抵抗も虚しく、彼の両手指は自身の髪の毛をぶちぶちと引き抜き、止まらない——！

「ミ、ミツル……。僕は、もうダメだ……。早く……。沙紀の下へ……。沙紀を、頼む……ッ」

「ば、ばかやろう！ 諦めんなよ、男女——！！！」

「もう、手遅れだ……！ ミツル……。早く行ってくれ……！ 早く……ッッッ！！！」

「うるせえ——！！！」

ミツルは両性院の手を取り、彼を強引に引っ張ろうとした。

だが、その直後には。

彼の視界は真っ赤に染まっていたのだ——。

「あつ……。なんだ、これ……。あ、熱い……？」

何かが、頭の上に乗っている。えらく重たい、何か金属の塊が。彼の頭頂に——。そこから、温かいものがなみなみと溢れ出している……。

そして、彼——、

川井ミツルの目の前には。

トゲ付き肩パッドを身に付け、

モヒカンを逆立てて、

手にした棍棒を親友の頭頂へ無慈悲に振り下ろしたばかりの、

両性院男女の姿があった——。

「おい、男女……ウソ、だろ……」

どさりと、川井ミツルは血溜まりの中へと倒れ……。

「男女……。沙紀を……沙紀だけでも……。お前が……たの、む……」

ぱくぱくと口を開きながら、必死にそれだけを訴える。
だが、親友の末期の言葉も虚しく、
モヒカンザコと化した両性院男女は、あの言葉を、
あの呪われた、『忌まわしき言葉』を、
絶叫したのである——。

「ヒャッハー！ 食料と水をよこせー！！！」

私立希望崎学園、通称『戦闘破壊学園ダングロス』——。

突如、現れた『転校生』の襲撃により、学内は混乱を極め、一般生徒の約九割はモヒカンザコとなってしまった。主力を失った生徒会、番長グループの残党は果たしてこの事態を収束できるのか？ そして、学園を訪れた『転校生』の真の狙い、とは——？

2010年11月6日。

第二回『希望崎学園祭』

開幕——！

【希望崎学園祭】

- ・「希望崎学園祭」は2011年2月に行われたダンゲロスの番外編キャンペーンである。
- ・「ダンゲロス」本戦と同様の世界観を使用しつつも、ゲームシステムには「1969システム」を用いており、コミュニケーションゲームとしての側面を強調している。
- ・プレイヤーは各自、特殊な能力を持った「魔人」を1キャラクター投稿し、「生徒会&番長グループ連合軍」「モヒカンザコ」「転校生」の三陣営のうち好きな陣営に所属する。
- ・各陣営は一名の代表プレイヤーを選出する。ゲーム当日はインターネットラジオを使用し、ゲームキーパー（審判役、以下GK）と代表プレイヤー三名の計四名によりゲームは進行される。
- ・ゲームはターン制となっており、「生徒会&番長グループ連合軍」「モヒカンザコ」「転校生」の順に行動する。4ターンで終了となる。
- ・各プレイヤーは自陣営の行動フェイズにおいて、自軍の行動予定をGKに提出する。GKはキャラクターのステータスを参照して行動の成功率を決め、ダイスによって成否判定を行い、リアルタイムで行動結果を物語化しながらゲームを進行する。
- ・また、あるキャラクターの行動が他の陣営に影響を及ぼす場合、他陣営のプレイヤーがリアクションを取ることができる。たとえばプレイヤーAのキャラクターがプレイヤーBのキャラクターに攻撃を仕掛けた場合、プレイヤーBは「避ける」「ガードする」「特殊能力で返り討ちにする」などを口頭で回答できる。これを「リアクション」といい、リアクションの猶予時間はその時のシチュエーション次第だが、基本的にはとても短い（1分以下）。代表プレイヤーには、即座に最適な答えを回答する即断能力が求められる。
- ・他陣営の能力を知ることはできない。これにより、「相手の能力を状況から判断し」「瞬時に敵の能力を見極めて対処する」能力バトルを疑似体験できる。
- ・なお、校内には野蛮なモヒカンザコNPCが無数に湧いており、彼らに囲まれると並の魔人PCは簡単に殺されてしまうので注意が必要だ。
- ・その他のルールは「希望崎学園祭wiki (http://www44.atwiki.jp/dangerous_fes/)」を参照されたい。
- ・以下二本の作品は「希望崎学園祭」の二次創作小説である。「1stDay」は二度行われたゲームの一度目の内容をノベライズ化したもの。「後夜祭」は二日目終了後の追加エピソードである。

<あらすじ>

魔人学園として知られる「私立希望崎学園」。その学園祭を強襲した三名の『転校生』。生徒会と番長グループは精鋭の魔人戦士を引き連れ、『転校生』の迎撃に向かうも全滅——。『転校生』の恐怖に怯えた学園生徒たちは絶望のあまりモヒカンザコと化してしまい、今ここに魔人vs『転校生』vsモヒカンザコの地獄の三つ巴戦が幕を開けた——！



「ヒャッハー！」

希望の泉——。

希望崎学園中央に位置する大噴水のことである。

そこで、雄叫びを上げたのは、ティラノサウルスに跨った少女——、少女のモヒカンザコであった——。

周囲のモヒカンザコたちの目は一斉に彼女に注がれ、口々に驚愕の叫びが飛び出した。

「な、なんだー！ あれは——！！？」

いや、彼らが驚き、目を奪われたのは、やはり少女よりもその乗り物——、ティラノサウルスの方であっただろう。『転校生』の襲撃を受け、混沌極めるこの学園にあってなお、ティラノサウルスは異形と言わざるを得ないインパクトを放っていた。だって、ティラノサウルスである。

これにモヒカンザコたちは驚き、呆れ、ある者は逃げ出し、またある者は逆上して手に持った棍棒をティラノサウルスに投げつけた。

「ヒャッハー！ 暴れるんじゃねー、このやろう！」

「ウギャー！！！！」

だが、そのような些細な抵抗がこの凶暴な肉食恐竜に通じるはずもない。果敢に棍棒を投じたモヒカンザコたちは、哀れ、ティラノサウルスに噛み付かれ、引き裂かれていく。そして、その場から脱兎の如く逃げ出した者たちも、また、

「ウッギャー！！！！」

突如、全身を一柱の火柱と化して燃え上がったのである。

そこにヌッと現れた巨大な影——。

そう、それは全長500mにも及ぶ巨大な龍——。西洋タイプのドラゴンではなく東洋タイプの龍の姿が、モヒカンザコたちの頭上から巨大な影を投げかけていた。

そして、その龍の吹き出す火の息で、周囲のモヒカンザコたちは次々と火柱と化していくのである。

「てめーら、逃げんじゃねー、ヒャッハー！」

ティラノサウルスに跨った少女のモヒカンザコが叫ぶ。

「死にたくなけりゃあアタイたちと一緒に来るんだよー！ 生徒会室にたんまり貯められた水と食料をまとめていただこうじゃねーか、ヒャッハー！！！！」

そして、少女を乗せたティラノはモヒカンザコたちを追い立てるように、職員校舎へ向けて駆け出していく。ティラノサウルスと少女、そして、恐竜の恐怖に駆られ職員校舎へと襲いかかる一群のモヒカンザコたち。彼らを動かすのは狂気にも似た破壊衝動。そして、食料と水への刹那的欲望。そう、それがモヒカンザコという生き物である。

一方、龍は巨体をくねらせながら芸術校舎へと向かい、辺り一体に炎を吐き散らした。

希望崎学園芸術校舎は哀れにも燃え落ち、校舎内にいたモヒカンザコたちは慌てて逃げ出しても、やはり龍のファイアブレスにより燃え上がっていく。なお、この時、モヒカンザコと化した両性院男女もまた、全身を炎に包まれ絶命していた……。

かような勢いで暴虐の限りを尽くす龍。

だが、その直後。かの巨体は突如として、かき消すように姿を消したのである——。

果たした、龍の身に何が起こったのか？

それを描くのは今しばらく後の話となる。

「おいおい。なんだよ、あれ……」

「うちの生徒にはティラノサウルスがいたのか……」

「てか、龍までいるぞ。……げ、げえっ、芸術校舎が！」

「ねえ……。あんなのがいたんじゃ、ひょっとして『転校生』が来ても来なくても、学園祭は大パニックだったんじゃないの……」

——などなど。

窓の外の惨状を見遣りつつ、愕然とした面持ちを隠せないのは生徒会残党の面々、ならびに番長グループ残党の面々からなる合併軍であった。

生徒会と番長グループの主戦力は、学園を襲った『転校生』三名の迎撃に向かい、生徒会長ド正義卓也、番長邪賢王ヒロシマを含めことごとく討たれてしまった。また、『転校生』襲撃の恐怖で、一般生徒たちは次々とモヒカンザコ化し、破壊と略奪の限りを尽くし始めた。生徒会、番長グループの残りの者たちも、混乱の中で多くが命を落としていった。今、ここ生徒会室に逃げ込むことができたのは、魔人長島史明（ながしまふみあき）を始めとする、わずか五名に過ぎない。生徒会と番長グループ。希望崎学園を代表する二大治安維持組織の残党が、今やわずか五名である。

その五名の男女。彼らは窓の外の景色に困惑を隠せぬ様子である。しかし、彼らの混乱も無理はない。『転校生』の襲撃に遭い、一般生徒がモヒカンザコと化しただけでも尋常ならざる事態なのに、ティラノサウルスや龍などという人外の化物が、今や学園を横行しているのだから。

「おい、あのティラノサウルスとか龍とかって、本当にウチの生徒なのか……」

「残念ながらどうもそうらしい」

生徒会の魔人、霹靂崎力（へきれきざきりき）が全校生徒名簿を差し出しながら言う。

「本当だ……。龍って三年生なんだ……」

「あんなのがいて、なんで今まで気付かなかったんだ……」

「あのティラノサウルス、ティラ野恐子っていうのね……」

「女子だったのか……」

「一体何を考えて入学させたのかしら……」

「オレもなんでこんな学校に入学しちゃったんだろう……」

彼らは揃って溜息を吐いた。

実際のところ、いま外で暴れているティラノサウルスや龍などは皆魔人であった。『転校生』襲撃の恐怖と絶望により一般生徒は次々とモヒカンザコと化していったが、その中には「魔人の一般生徒」も少数存在し、彼らもやはりモヒカンザコとなっていたのである。まあ彼らは魔人がどうのとか言う以前に龍でありティラノサウルスなのだが……。

ちなみに、モヒカンザコと化した魔人が、皆、龍やティラノサウルスのように暴虐の限りを尽くしているわけではなく、例えば同じく魔人の冷汗まみれちゃんなどは、モヒカンザコ化した後に番長小屋へ食料を探しに行ったところで、一般のモヒカンザコの群れと遭遇。食料を強奪されてそのまま打ち殺されてしまっている。龍やティラノサウルスが別格なのであり、魔人とはいえモヒカンザコの群れに襲われれば通常はひとたまりもない。

と、このような状況に残党合併軍の皆々は愕然とした気持ちを隠せずにいたのだが、

「……みんな、外の状況に絶望する気持ちは分かる。だが、今はオレたちのやるべき事をやるんだ」

長島が檄を飛ばし、皆もハッと我に帰って作業に戻った。そう。いま、彼らはこの混沌を一掃すべく、起死回生の策を練っていたのだ。名付けて「魔人月読七菜の爆殺ライブ」。

作戦の概要は以下の通りである。まず、魔人霹靂崎力有能力『ワンダーフル・スペック』により、マイクとスピーカーの出力限度を限界を超えて強化する。霹靂崎の『ワンダーフル・スペック』は電気製品の性能を上限を超えて引き出すことができる（たとえば、「強」までしかない扇風機なら「強の強の強」くらいまで引き出せる）。そして、増幅されたマイクを用い、魔人アイドル月読七菜が熱唱ライブを行う。元々、彼女は学園祭のメインステージを張る予定だったこともあり、声量、歌唱力共に申し分なし。そして、月読の歌声を爆音で学園中に響かせたところで、魔人オーゴエが能力『相対性爆音』を用いるのだ。彼の能力はあらゆる音の大小と強弱を調節する。これにより月読の爆音をさらなる爆音へと昇華する。すると……、

爆音×爆音

= 「爆発」である。

限界にまで増幅された爆音は爆発に等しい。よって、月読のライブを聞いたものは頭が爆発して死ぬ。

…………と、これが窮地に追い込まれた彼らの、考えに考え抜いた末に生まれた最後の手段であった。むろん、これをやってしまえば、爆音の中心地にいる月読たちとて絶命は免れないだろうし、モヒカンザコと化した一般生徒たちも助かるまい。『転校生』を倒せるかもしれないとはいえ、この学園心中大作戦は乱暴に過ぎ、些か正気を失っている感もあったが、主力を討たれた敗残兵に過ぎぬ彼らには、もはやこのような非常手段しか残されていなかったのだ。

「おい、こっち見てみろよ。ひでえ有様だぜ」

魔人炉端比多岐（ろばたたき）はブロック肉に触れると、一瞬でそれを、ほかほかの湯気が漂う焼き立てのマンガ肉へと変えた。そして、それを窓から下へ落とすと……、

「ハッハー！ 肉だー！」

「おおおれの肉だああああ！！！！」

どこからともなくモヒカンザコたちがワッと集まり、一片のマンガ肉を巡って血みどろの争いを繰り広げ始めた。まるで屍肉に群がるピラニアの如き有様である。

「ひどい……。どうしてこんなことに……」

「もう、彼らはオレたちの知っている彼らじゃない」

「爆殺するしかないのね……」

——と、彼らが顔を歪ませたその時であった。

新校舎の方から、何やら巨大な落下音が聞こえたのは。そして、突如として校舎を襲った突風と大雨。その後に残っていたのは、一匹の巨大な龍の死体であった。実に信じられないことであるが、全長500mを越す巨大な龍が、新校舎の上に突如現れ、新校舎を押しつぶし、そのまま生き絶えたのである……。

「な、なんだこりゃ」

「龍が……死んだ、のか……??」

彼らには訳が分からない。だが、彼らにも呆けているヒマなどはなかった！

——ガンッ！

階下から壁の突き破れた音が聞こえた。

そして、同時に、彼らの野蛮な雄叫びも——。

「ヒッハー！」

「水と食料をよこせー！」

「生徒会室の食料はオレのもんだー！」

ハッとした長島は慌てて窓から身を乗り出し、階下を見下ろすと——、

「や、やられた……！」

そこには、生徒会室を見上げてニヤリと笑ったティラ野恐子と、モヒカンザコ少女——彼女の名をグレートモヒカンという——の姿があった。彼らが龍の死体に気を取られている隙に、モヒカンザコどもが職員校舎を強襲したのだ——！

「が、外壁を破られたぞ！ すぐにもここまで上がってくる！ 迎撃体勢を整えろ！！！」

長島は慌てて叫ぶも、生徒会&番長グループの残党混成軍に秩序ある動きなど期待できるはずもない。そして、彼らには腕力もない。戦える力があるやつらは、先に『転校生』の迎撃に向かい、みな殺られていたのだから。そうこうしている間にもモヒカンザコたちの、水と食料を求める声はどンドンと近付いてくる。

「なっ、長島……、無理だよ……！ オレたちじゃモヒカンザコに勝てっこない！」

「ちくしょうッ！ まだライブの準備は整ってねーぞ！」

「く、くそっ……！ あ！ そ、そうだ……！」

長島は月読にマイクを手渡した。そして彼は、窓の外に見える龍の死体を指さして、

「月読、思いっきり叫べ！」

すると、彼女も合点がいった様子を見せ、大声で叫ぶ！ 伝える！！

窓の外、——龍の死体を！！！

「……ん？」

「……ああっ！？」

「ホントだ、龍が死んでやがるゾ！」

「ヒッハー！ 肉だー！！！！」

ど、ど、ど、ど、ど……。モヒカンザコの群れは龍の肉へと殺到していった。さすがはモヒカンザコである。単純極まりない。ホッと胸を撫で下ろす月読たち。彼らは助かったのか？ いや——、

「うおおおお、さっきのマンガ肉をよこせー！」

「あのマンガ肉はオレんだー！」

いや、なんということだろうか。すぐ目の前の龍の巨大肉には目もくれず、モヒカンザコの半数ほどは生徒会室に向かって進軍を止めない！ 炉端比多岐の能力『究極の焼肉』は、あらゆる肉片を究極のマンガ肉へと変える能力である。先程、窓から放ったマンガ肉が美味すぎたのだろう。あの味を覚えたモヒカンザコたちは龍の肉には目もくれず、生徒会室へと殺到してきたのだ。これはヤバイ。絶体絶命である……！

「みんな、ここまでね……」

皆の方に顔を向けると、魔人アイドル月読七菜は悲しげにそう言った。そして、

「みんな、先に逃げて……」

「月読。お前はどうする気だ……」

「私は、ここに残る……」

「……………！」

皆の顔が青ざめた。

「私はここに残ってライブをするわ。モヒカンザコたちは私に殺到してくるはず。そのうちにみんなは逃げて……！」

「そ、そんな……！」

「他に方法はないわ」

「す、すまん！ 月読……！」

迷いを見せる他の三人を強引に引っ張り、長島は生徒会室を飛び出した。

背後では月読が命を賭したライブを行い、モヒカンザコの群れを引きつけている。モヒカンザ

コが彼女に殺到し、その歌声が断末魔の叫びに変わるのを、だが、振り向かずに、彼らは背中で聞いた——。

「月読！ お前の分まで、お前の分まで、オレたちは絶対に生きる！ この学園を——、みんなを元に戻してみせる——！」

長島は血涙を流し、歯を食いしばりながらそれを誓った。だが、なんということだろうか——！

「ギェッヘッヘエ～～」

「食料と水をよこせー！」

「ハッハー！」

なんと！ 彼ら四人の前にも無数のモヒカンザコの群れが現れたではないか！

あれだけの数のモヒカンザコを月読が惹き付けたにも関わらず、まだ目の前に！ これだけの数の！ モヒカンザコたちが……！！！！

一体、この学園にモヒカンザコは何匹いるというのだ——！！？

「クッ！ 全員、散らばれ！ 各自でルートを見つけて脱出しろ！ グッドラック！！」

固まってもモヒカンザコの群れに押しつぶされるだけである。

長島は一人でも生き延びる可能性のある作戦を出したつもりだった。しかし、これは無論、誰かの犠牲を覚悟した上での戦術だ——。

「ギャア！」

初めにモヒカンザコに頭を打ち砕かれたのは魔人炉端であった。おそらく、マンガ肉の残り香が悪鬼たちを惹きつけたのだろう。棍棒の一撃を頭頂に喰らった炉端は血溜まりの中へと崩れ落ちた。

一方、他の者たちは活路を切り開くべく足掻いていた。流石は魔人である。例えば、霹靂崎は自身の説得術をもって身近のモヒカンザコたちに龍の屍肉のことを伝え、彼らをそちらへ誘導することで保身を図っていた。これは僅かながらも時間稼ぎとして効を奏していたが、しかし、この狂乱の中で説得可能なのは、彼の声が届く、ごく手近な範囲のモヒカンザコに限られる。戦場ではトゲ付き棍棒が無数に飛び交っているのだ。やんぬるかな。魔人霹靂崎力はしばらく後、飛来した棍棒の直撃を防げず、死亡する——。

オーゴエはモヒカンザコの攻撃をかいくぐり、辛くも新校舎の方へと逃げ出た。血まみれの校舎を抜け出て、陽の光を見た彼はホッと安堵する——。いや、しかし！ そこには龍肉に群がるモヒカンザコの姿があった——！

「おおっ！？ 生徒会のやつだー！」

「弱ってるぞ！ ぶっ殺せー！ ヒャッハー！」

憐れ、オーゴエもモヒカンザコの群れに押しつぶされて死亡。弱っている者を見つけるとモヒカンザコは積極的に襲いかかってくる。そういうものである。

この中でもっとも善戦していたのは、間違いなく魔人長島だっただろう。彼は腕力に優れた魔人であった。押し寄せるモヒカンザコを次々と、たった一撃で殴り殺していく。だが……。しかし、多勢に無勢！ 四方八方から棍棒は振り下ろされ、肩口を打たれ、脛を砕かれ、たまらず膝を屈した長島の頭頂に、無情にも棍棒が振り下ろされる。直撃を逃れえぬ長島は、全身血まみれとなりながら、それでも気力を振り絞り、這いながらも校舎外へとまろびでた。だが、その時——。

長島の姿は既にそこになかった。代わりにあったのは、下半身の膺をぐちゃぐちゃと振動させ、何かを捕食するティラノサウルスの姿——。

そう、魔人ティラ野恐子であった。彼女の能力『ジュラセックス』は膺の運動を活発化させ、強力な吸引力を発生させて周囲の対象を膺内へと吸い込み、そのまま捕食するというおぞましきものである。いま、彼女の膺内でぐちゃぐちゃに噛み砕かれているものこそ、かつて長島史明であった肉塊に他ならぬ。ティラ野恐子、ジュラ紀からやってきた脅威の肉食系女子である——。

だが、この時、ティラ野恐子の体に——。

いや、彼女ばかりではない。その上にまたがる少女、グレートモヒカンの体にも、ある一つの恐るべき変化が訪れようとしていた。

しかし、これを語るのも、また少し後の話としたい。

「先輩……。なんなんです、あれ……？」

「いや……。オレに聞かないでくれ……」

「あたし、もう、おうち帰りたい……」

前方から上がる火の手を眺めながら、溜め息混じりに呟くのは——。ユキミ、黒鈴（くろすず）、ムーの『転校生』トリオであった。報酬と引換に召喚者の求めに応じて依頼をこなす、次元の旅人『転校生』。魔人さえも凌駕する肉体能力を備えた彼らは、この度、天音沙希確保の依頼を受けて、この学園を訪れたのだが——。

「なぜか生徒会と番長グループのやつらから迎撃を受けるわ……」

「そいつらを皆殺しにしたら、今度は校内の生徒たちがモヒカンザコになっちゃっし……」

「龍まで暴れてる……。訳分かんないよ……」

彼らの眼前の光景は混沌そのものであった。人々から恐れられ忌み嫌われている『転校生』である。人々が彼らを恐れ、恐慌をきたし、パニックに陥ることは珍しいことではない。……ないが、人々が皆モヒカンザコになるなど、これは前代未聞の珍事である。生徒会と番長グループの残党たちが、モヒカンザコや龍の前に啞然としていたように、騒動の張本人たる『転校生』たちもまた愕然としていたのだ。

「……あの、ユキミ先輩。こういう経験って前にもありました？ ていうか、人ってパニックになったらモヒカンザコになるものなんですか？」

ルーキーのムーは、ベテラン『転校生』のユキミに尋ねる。もっとも、ルーキーだのベテランだのと言っても彼らの見た目は大差なく、三人とも高校生程度の若々しい姿である。次元の旅人『転校生』は老いることのない存在でもあった。

「……いや、聞いたことない。そんな馬鹿な話があつてたまるか」

「そういえば、千尋ちゃん。最近、寝ても醒めてもモヒカンザコのことばかり考えてる……って、ゆまちゃんが言ってたけど……」

「ああ、じゃあ間違いないな。千尋嬢の仕業だ」

「そっか。そういうことなら仕方ないですね」

『転校生』たちは謎めいた会話を交わしながらも、各々、それなりに納得した様子である。

「それにしても、あの龍はないな～。なんで高校に龍がいるんだよ……」

彼らの前方2キロ先では今も全長500mを越す巨龍がうねりかえり、口から吐き出す炎で学園を焦土へと変えている。大地から湧き上がる黒い煙が視界を遮るが、それでも龍の巨体は隠しきれない。

「あれって……、希望崎の生徒なのかな……？」

『転校生』トリオの紅一点、黒鈴は眠たげな様子でぼんやりと口にする。彼女はいつもこんな表情と口ぶりだが、別に眠いわけではなく、これが素である。

「まあ、この学園はアホだからな。可能性はあるだろ」

「龍が生徒だとして……。いつもどうやって授業受けてるのかしら……」

「そもそもサイズの的に教室に収まらないよな。入試なんかはどうやって受けたんだろう？」

「人間の言葉とか分かるのかしら……。ていうか、何のメリットがあって龍は学校に来てるの……？ 就職がどうか、そういう問題じゃないよね……」

「……あの、先輩たち。……真面目に考えるのやめませんか？」

ムーに諭されて、二人とも我に返った。

「そうだな。とりあえず落ち着こう……。落ち着いて、冷静になって、目の前の状況に対処しよう……」

「ねえ、ちょっと思ったんだけど……。あの龍って、実は結構……」

「そうですね……。ヤバイですよ……」

彼らの目的はミス・ダンゲロス天音沙希の確保である。彼女を学園から連れ去り召喚者へと引き渡すのが今回の仕事だった。然るに、いま龍は辺り構わず火炎を吐き散らし、あちこちを焦土へと変えている。既に芸術校舎は全焼し、番長小屋の方角からも火の手が上がっていた。こんなものを放置しては、いつ天音沙希が巻き込まれて死んでしまうか分からない。

「先輩、やりますよ？ 天音さん、まだ生きててくれればいいんですけどね……」

ムーが高々と右手を挙げる。呼応して宙に一つの光がきらめいた。

と、その途端。龍の頭上に突如としてアダムスキー型円盤が現れ、青白い光を発してスルスルと龍の巨体を吸い込んでいく。友好的宇宙人と心を通わせ、対象をアブダクションするムーの能力『木曜スペシャル』であった。

「なあ、お前の友達の宇宙人さ。龍とかアブダクションしたことないよな……」

「そうですね……。牛とか人とかは慣れたものですけど。龍はちょっと……」

「インプラントとか……大丈夫なの……？」

「さあ。どうでしょう……？ いかんせん、龍ですし……」

などと言っていると、ユキミがハッと何かに気付いたらしく、ムーを手招きする。

「なあ、お前、もうちょっとこっちに来といた方がいいと思うぞ。あの龍、遠目に見た感じ、結構大きかったからな。校舎が巻き込まれるおそれがある」

「分かりました。……って！ ああっ、もう来るみたいです！」

次の瞬間――。

『転校生』トリオの頭上にUFOが出現し、青白い光と共に全長500mの龍がスルスルと降りてきて、そして――、

「わっ……！」

「やっべ！！！」

龍はその場にドテーンと横たわったのだが、そのサイズは彼らの想像以上だった。ユキミの懸念通り、龍はそのまま新校舎へともたれかかって……

ガラガラガラ……ドッシャーん！！！！

「あわわわ……！」

「おいおいおいおい……」

新校舎は見事に倒壊！

「ちょ……。まずいな。まずいぞ。中に天音沙希がいたら死んだんじゃないのか？」

「これで天音さん死んじゃったら、僕たち何しに来たの、って感じですよな……」

ベテランのユキミも困惑を隠し切れず、珍しく狼狽している。



一方、その龍はと言えば自分の身に何が起こったのかも分からないようだったが、突如として唸り声を上げると、辺りに強烈な嵐を巻き起こした。

「わっ！ わわっ！ な、なんですか、これ——！」

「おい、龍は嵐まで起こすってか——！！！」

「ひゃああ！ スカートがめくれるー！！！」

それは雨と風による猛烈な陵辱であった。辺りのモヒカンザコたちは木の葉の如くに宙を舞い、あちらこちらへと吹き飛ばされ、あるいは地に叩き付けられてミンチと化していく。さすがに『転校生』たちが吹き飛ばされることはなかったが、

「先輩！ ヤバイですよ！ まだ天音さんが生きてても、これじゃやっぱり死んじゃう——！」

「分かってる——！」

ユキミは地を蹴った。そして、巨龍に飛び付き、その胴体にある鱗の一枚を掴むと、

グイ——ッ

と、強引に龍の巨体を地に叩きつける。無限の攻撃力を有する『転校生』には龍のウェイトなど関係ない。さらに間髪入れずにユキミは手刀の一撃を叩き込み、龍の首を斬り落とした！ 『転校生』の一撃の前には、頑強な鱗に覆われた龍とて一溜まりもないのだ。

龍の絶命と同時に吹き荒れていた嵐も収まった。すると、先程まで風に吹き飛ばされるがままだったモヒカンザコたちも、何時の間にやらわらわらと周囲に集い来て、

「ハッハー！ 肉だー！」

「龍の肉が食い放題だ、ハッハー！！」

などと叫んでは早くも龍の屍体にかぶりつき始めている。なんというバイタリティであろうか。さすがはモヒカンザコと言うしかない。

「えい——っ」

黒鈴のナイフがキラリと煌き、たちどころに龍の頭蓋は切り分けられ、こぶし大の脳みそがパツクリと露出した。キレイなピンク色である。ムーは興味深そうに覗き込んだ。

「龍の脳みそって意外と小さいんですねー」

「まあ、意外も何も、龍の脳みそなんか見たことないけどな。小さくても不思議じゃあない。で、どうだ、黒鈴？」

「ひがいとおいひー」

彼女は龍の脳みそをはぐはぐと手づかみで食べていた。魔人の脳みそを完食することで、相手の能力をコピーする——、黒鈴の魔人能力『XYZ』である。普段は主に人間の脳みそを食べているため嫌悪感から吐き気なども催す彼女だが、人の形をしていなければ結構平気なようで今日は気楽にむしゃむしゃ食べている。「羊の脳みそカレーとかって美味しいんだよ」などと普段から言ってるだけはある。

「しかし、ユキミ先輩。うまくいくんですかね、こんなの」

「さあ？ いかんせん龍の魔人……ん、魔人なのか？ まァ、龍の魔人……なんて初めて見たからな」

ユキミは学園敷地が描かれた地図の大枠を赤ペンでなぞると、それを黒鈴のポケットに入れ込んだ。魔人の能力範囲を拡大・縮小するユキミの能力『有無』である。これだけで彼女の能力範囲は学園全体に拡大された。三人の『転校生』は本来の目的である天音沙希確保に、この龍の能力が使えるのではないかと見当を付けたのであった。

「この龍がどういう能力か分からないが、とりあえず空が飛べれば上空から見渡せるだろ。あと、火も吐けて嵐も起こせたんだ。ひょっとして神通力かなんかで天音の位置が分かるかもしれない」

——という目論見である。

そのために彼女に地図を持たせ、その能力範囲を学園全体に拡大させたのだが——、

「わっ！ わわっ……！」

龍の脳みそを食べ終わった黒鈴は、予想外の展開に驚愕の声を漏らすことになる。だが、それもやむを得ないだろう。なにせ、彼女は今——、

「わわわ、なにこれ！ なにこれー！」

彼女は今、龍になっているのだから。全長500mを超す巨大な龍の姿に変わっていたのだ。

「参ったな……。コイツ、龍になる能力だったのか」

「ドラゴラムってやつですかね？」

見ると、黒鈴ばかりではない。ユキミもムーも全長500m超の龍の姿になっているし、いや、それどころか、眼前一面に無数の巨龍がひしめき合って、各々、思い思いに炎を吐いたり、嵐を巻き起こしたりしている（だが、お互い龍なので炎も嵐も効いていない）。

「黒鈴先輩。これ、ドラゴラムでいいんですかね」

ムーがふらふら浮きながら尋ねてくる。

「えっ——、えっとね……。うー、ちょっと違うというか。なんだろ、これ……」

実のところ、先の龍の能力はドラゴラム（龍化能力）などではない。この龍の能力名は『野生の龍としての特性』。つまり、「龍が龍である」ということが「能力」なのである。断じて、人間が龍になる能力ではなかった。龍は元々龍なのだ。龍が龍であるという、その『認識』こそが龍の能力なのである。

黒鈴が龍の脳みそを完食し終わった瞬間、『XYZ』により、『野生の龍としての特性』を黒鈴は身に付けた。すなわち、黒鈴は自身が龍であると『認識』し、実際に龍化したのである。そして、ユキミの『有無』により、その『認識』は学園中の全ての意志ある生物が持つこととなり、ユキミ、ムーも含め、学園中に溢れたモヒカンザコたちはこうして皆、見事に龍と化したのであった。なお、職員校舎地下のシェルターに閉じ籠っていた教職員たちは、密閉空間で皆が龍化したため、ギチギチのグチャグチャになって全員が圧迫死している。

「ん、とりあえず神通力の類は使えませんね……。火を吐くのと、嵐を起こせるのと……。あと、龍の心臓を食べたら不老不死になれるみたいですけど」

「不老不死か……。ヘタにそんなものになったら大変だよなー」

「ね、さっき、モヒカンザコが何人か龍の心臓食べてたよ。ひょっとして、あの子たち今ごろ不

老不死になってるのかな……」

と、何やら『転校生』たちがモヒカンザコの心配までしてしまう。だが、そんな彼らの心境も知らず、龍化したモヒカンザコたちはハッハー！　ハッハー！と叫びながら、大空をのんきに漂っていた。

「とりあえず、この状態はダメだなあ……。みんな龍になっちまってるから見分けも付かない」

「どれが天音さんの龍だか、分かりやしませんもんね」

「黒鈴。悪いけど」

「うん……」

龍になった『転校生』たちはすっと地上へ降りると、龍になったユキミが龍化した右手（前足？）を黒鈴の龍化した口の中へグイグイと押しこんだ。すると、彼女はおえつとえずいて、先程飲み込んだ脳みそを吐き出してしまふ。

——と、途端に彼らの龍化が解ける。彼女の能力『XYZ』は新しい脳みそを食べるか、うんこするか、吐瀉することでコピーが解除されるためだ。しかし、次の瞬間——！

「ハッハー？　ウギャアア——！！！」

「ひでぶ！」

などと、学園中にモヒカンザコの悲鳴が響き渡った！　「ええっ！？」と思い、慌てて空を見上げると——、

なんと無数のモヒカンザコの群れが、流星群の如く、次々と地面に落ちていくではないか。だが、まあ、それはそうだ。先程まで優雅に上空を舞っていたモヒカンザコたちだ。いきなり龍化が解除されれば、高空より落ちる他ない。

「あ、あああ～……」

「あちゃ～、先輩！　こりゃ大失敗ですよー！」

「えっ、わ、私が悪いんじゃないよね！？」

学内中のあちらこちらから無数のモヒカンザコの断末魔が響き渡った。「あっちゃ～」と頭をかきながらユキミは考えてしまう。「これ、天音沙希も間違いなく死んだよなあ……」と。「今日は何一つイいことなかったな……」とかも考えてしまう。

まあ、実際のところ、天音沙希は龍がUFOから落ちた時に、新校舎の下敷きとなって既に死んでいたのだが。さて、その一方で——、

——な、何が起こったジュラ……？

ティラ野恐子は瀕死の体で這いずっていた。彼女の思考は困惑の極みに達している。

職員校舎を襲い、魔人長島史明を己の膾内に吸い込んで捕食した直後。彼女の体は突如として変貌を遂げ——、龍へと変わっていた。「ウホッ、あたし、龍にジョブチェンジ！？ ヒャッハー！」などと浮かれていた彼女だが、次の瞬間には、なぜか真逆さまである。そして、地上150mから落ちた彼女は地面に全身を叩き付けられ、幸い即死は免れたものの、今や瀕死の体で地を這いずっているのであった。

——ほ、捕食……。捕食するジュラ……。

全身の骨をバキバキに折られながらも、ティラ野恐子の膾は活発な運動を開始していた。この土壇場であって、それでも『ジュラセックス』——、膾による捕食を企んだのは流石はティラノサウルス界のスーパービッチである。希望崎学園が誇る肉食系女子であった——。

だが、これは簡単なことではない。周りにはモヒカンザコの屍体が転がるばかりだ。彼女の上にまたがっていたモヒカンザコの少女——グレートモヒカンでさえ、落下の衝撃で息絶えていたのである。魔人のモヒカンザコでさえこのとおりだ。並のモヒカンザコでは生き永らえるわけがない。彼女は肉食系ビッチではあっても、性癖自体は至ってストレートである。死姦だとか、そういうマニアックなプレイはごめんなのだ。

——ううッ。生きている男……生きている男はいないジュラか……？

と、そんな恐子の願いが天に通じたのか。「いてえよお～～」「ヒャッ…ハ……」などと、息も絶え絶えで転がっている数人のモヒカンザコの群れを彼女は目にする！

——神様、ありがとうジュラ！

天に感謝を捧げつつ、ティラ野恐子は己の膾を激しく振動させる。活発な膾の運動により強力な吸引力を発生させ、獲物を膾内に吸い込み、そのまま捕食するティラ野恐子の肉食系魔人能力『ジュラセックス』である。たちまちモヒカンザコの男たちは彼女の膾へと吸い込まれて、膾内に存在する無数の歯に噛み砕かれ、ごっくんと、彼女の胃の腑へと収まった。

——満腹ジュラ……。

だが、彼女が一息ついた、その時であった……！ その体内において、何か異常なものが動き出す感覚に彼女は捕らわれ、その巨体は過激な拒否反応を示し始めたのだ。……ああ、なんということだろうか！ 先程、彼女が飲み込んだ数名のモヒカンザコたち。彼らこそ、先に龍の心臓を喰らって不老不死化した不滅のモヒカンザコに他ならなかった。高空より落ち、ティラノの膺に噛み砕かれてなお、彼ら不滅のモヒカンザコに死はありえず、悲惨な姿のままながらも今も超速再生を続けていたのだ。あと小一時間もすれば、彼らはティラ野恐子の体内を突き破って現れることだろう。しかし、慈悲深いことに、ティラ野恐子がそのような無残な思いをすることはなかった。もとより瀕死であった彼女の命は、先の激しい拒否反応により既に事切れていたのだから……。

「レ、レイプを……レイプをするんだ……。オレは、レイプを……。レイプを……」

もう一人――。

この学園を瀕死の体で這いずり回る、もう一人の男がいた。

彼の名を糞野賊夫（クソノゾクオ）という。その性格たるや、まさに名は体を表すの言葉通り。テンプレートなまでのどチンピラなクソ野郎である。平日の主な活動は略奪行為、破壊行為、薬物乱用、ごくまれに慈善活動であり、今回の学園祭も「いつもより多額のカツアゲができるぜ、ヒッター！」などと考えての参加であって、モヒカンザコ化してもしなくてもあまり変わらない、そんな糞野賊夫であった。

と、そんな彼もまた、やはり例外なく先の騒動に巻き込まれており、なぜか龍化したと思ったら、次の瞬間、高空から落下していたのである。彼は持ち前の悪運により、やはり即死こそ免れていたものの、傷は決して浅くなく、こうして瀕死の体で這いずり回っていたのであった。

「レ、レイプ……。レイプするんだ、オレは……。かよわい女子高生を、無理矢理に……レイプするんだ……」

だが、流石は糞野賊夫。この土壇場にあって、最期までレイプを企む辺り、なるほど、生まれつきの低能どチンピラ。見上げたまでのクソ野郎。バカの希望崎チャンピオンである。

しかし、とはいえ、彼の周りにもモヒカンザコの屍体が転がるばかり。そもそも一般生徒の女子もあまさずモヒカンザコと化しているのだから、この学園中のどこを探したって、かよわい女子高生など見つかるはずもないのだが……。

「ううッ。かよわい女子高生……女子高生はいないのか……」

と、そんな糞野の末期の願いが天に通じたのだろうか。ついに彼は、かよわい美少女の姿を――、ついでに、決してかよわくはなさそうな二人の男子の姿を、彼は目にしたのだ！

――神様、ありがとうレイプ！

横の男たちのことは積極的に忘却して、瀕死の糞野賊夫は必死に少女の方へと近づく。「レ

イプ……」 「レイプするんだ……」と呟きながら。だが、そんな彼も、ここまでが限界であった。念願の美少女を前にして、糞野賊夫の命は費えようとしていたのだ。……まあ、彼が五体満足でも、レイプなど到底不可能だったのだが。だって、目の前の少女は『転校生』の黒鈴なのだから。

「うう……ッ、レイプが……。レイプがしたかったよ……。神様、最期に……オレ……。レイプが、したかったな……」

と、糞野はどうしようもない遺言を残し、最期にフッと良い笑顔を浮かべると、安らかな表情で永久の眠りについた。すると、その瞬間——、

『エンダー———イヤ———』

美しいBGMが辺りに響き渡った——！ 映画「ボディガード」の曲である。なんていう曲名か知らないけど。そして、バックには血肉の花が散り、夕陽が赤く辺りを照らし出し、

「ああ！！ 哀れ！！ 何の罪もない糞野！！」

「彼は、ただ、レイプがしたかっただけなのに……！」

「どうして、こんな悲劇が彼を襲ったのだろう……！！！」

などと、どこからともなく謎のナレーションが轟き、『転校生』たちも何故かうるうると涙を瞳に溜めていた。——そう。

これぞ糞野賊夫の魔人能力『週刊モヒカンの強敵（とも）』であった。これは糞野が死亡した時に自動発動する能力であり、糞野の死を無理矢理『感動的な死に方に上書きする』。その死に様がどれほど馬鹿らしいものでも、それを見た者は、まるで親や恋人、強敵（とも）とのドラマチックな別れであるかのように錯覚してしまうのだ！ 無論、『転校生』とて例外ではない。

「うう……。可哀想な糞野くん……！」

「糞野は本当にレイプがしたかっただけだったのにな……。どうして、彼がこんなことに……」

「糞野くんは本当に尊敬できる人でした。僕、こんな真っ直ぐなチンピラ、見たことありませんでしたよ」

三人が三人とも、糞野の死に感じ入り、嗚咽を漏らしていた。すると、

「糞野くん、待っててね……」

黒鈴は愛用のナイフを取り出し、糞野の一物を切り取った。

「く、黒鈴……お前……」

「わたし、糞野くんの最期の願いを叶えてあげたいの」

「先輩、あなた、本当に素晴らしい女性（ひと）ですね……」

「黒鈴、お前と一緒に仕事ができ、オレも本当に誇らしいよ」

「先輩。今日は糞野くんの追悼式ですよ。彼も湿っぽいのは嫌いなはずですよ。パーッと盛り上げていきましょう」

「そうだな、糞野との友情の日々を振り返りながら、朝まで語りつくそう」

「糞野くん、待っててね……」

黒鈴は糞野の一物に頼りしなげらうっとりとし、ユキミとムーは両手に龍の肉を携えて希望崎学園から去っていく——。天音沙希確保の依頼は果たせなかった。だが、彼らの手には龍肉がある。今日は龍鍋パーティーだ。死んでいった親友——、糞野賊夫のことを想いながら、彼らは一晩中語り明かすだろう。糞野と培ってきた友情の日々を——。糞野と過ごした、あのかけがえのない日々を記憶を——。

ありがとう、糞野。

さようなら、糞野賊夫——。

僕たちはキミを忘れない。いつまでも——。

FOREVER...

<完>

本文：架神恭介（<http://www.pixiv.net/member.php?id=1149979>）

挿絵：今日知ろう（<http://www.pixiv.net/member.php?id=198683>）

果たしてだれがこの展開を予想できただろうか？

無限の攻撃力と防御力を併せ持ち、尋常の攻撃は意味を成さない。条件を満たすことで即死させる論理能力か、同士討ちでもさせなければ撃破は不可能と言われる異世界からの死者、転校生。

卓越した身体能力と己の世界観に根差した異能を操るヒト科最強の生命体、魔人。その魔人を多数擁し、日頃から練り上げられた緻密な連携と高度な戦術を武器に日々争いを繰り広げていた生徒会役員達と番長グループ。

かつて敵対していた彼らが、生徒会長及び番長の敗北を機に団結して結成された連合軍。舵取りや戦後処理に関する問題で揉めることも危惧されたが、幸いにして彼らは転校生という脅威を前に一つになった。

そして、誰もがその出現すらも予想だにしなかった第三の勢力、モヒカンザコ。生徒会長たちの敗北の報せを聞いて危機感を募らせた生徒会役員と番長グループのメンバーが手を取り合ったのと時を同じくして発生した彼らの正体は一般の生徒。

絶対的な抑止力とも言える生徒会長——ド正義 卓也と、見た目に反して温厚な、そして見た目通りの実力を誇る番長、邪賢王 ヒロシマを同時に失い、核すらも凌ぎ得る転校生の脅威に晒された無力な若者達。

彼らが生存の為に急激な、進化と言うにはあまりにも急激な変貌を遂げたのが魔人達の学園、希望崎学園に突如沸いて出た無数のモヒカンザコの正体であった。

人間にしては中々に屈強(厳密にはヒト科モヒカンザコであって人間ではないのだが)な肉体と、ひたすらに水と食料を求める本能、強者に媚びへつらう事で生き延びようとする精神性——等々、既存の人類とはかけ離れた特徴を無数に併せ持つ。

もっとも、彼らの力は人間にしては屈強止まりで、魔人相手にタイマンを張って勝てるほどの強さは持ち合わせていない。おそらくは特殊能力特化の魔人が能力を封印した上で戦ったとしても、両の手の指が足りる範囲の頭数であれば互角に渡り合えるだろう。

果たして、誰が予想できただろうか？

この3つの勢力が衝突して、モヒカンザコが他の勢力の一切を駆逐してしまったというこの恐るべき現実を.....

「ひゃっはー！ この学園は俺達のものだー！」

「水も女も食料も全部俺達のものだー！」

「ひゃっはー！ ひゃっはー！」

もはやモヒカンパラダイスと化した希望崎の校内に響き渡るモヒカンザコ達の勝ち鬨。荒廃した学園に彼らを止める世紀末の英雄はいない。が、彼らの獲物である一般生徒もいない。一人残らずモヒカンザコ化しているのだから当然と言えば当然である。

その結果、彼らはモヒカンザコVS人類という既存の枠組みから解放され、同時にモヒカンザコVSモヒカンザコという新たな闘争の牢獄へと囚われた。

荒涼とした校舎を跳梁跋扈するモヒカンザコの総数は768匹。書籍版において記述された生徒数よりも多いのはモヒカンザコが非減数分裂したものだと思って割り切って頂きたい。また、人ではなく匹と表記されているのは決して誤字ではないので悪しからず。また、匹ではなく人と書いていた場合、ただの横着なのでこれも気にしないように。

同じモヒカンザコで、まがりなりにも仲間である筈の彼らを分かち価値観は2つ。モヒカンザコ化する前は魔人であったか否か、そしてモヒカンの質である。

特にモヒカンの影響力は絶大で、彼らは真に優れたモヒカンを持つ2名の女性の下に集い、女王蜂に従う働き蜂の如く従順に悪逆の限りを尽くした。

果たして2つの妙なるモヒカンのうち、どちらが真に優れたモヒカンなのか？

モヒカンザコ達がそのような疑問を抱き、或いは略奪の対象を求め、或いは女王蜂と交尾する権利を求めて他方のモヒカン達に敵対心という形で関心を抱くに至るにはさほど時間を要さなかった。

「ひゃっはー！俺達こそが真のモヒカンだぜー！」

「ひゃっはー！お前達はファッショモヒカンだぜー！」

2つの勢力は学園内では最も多くの水を目に見える形で蓄えている広場——通称、希望の泉へと本能によって導かれ、運命によってこの場で雌雄を決する事を定められた。

一方の勢力の女帝はモヒカンにとっての神にして神器、神聖にして不可侵なる至高のモヒカン、即ちモヒカンという概念そのもの——はじまりのモヒカンと呼ばれるそれを戴く元転校生、首狩りあずにゃんこと石野 梓。手にしたチェーンソーを振り回し、一度の跳躍でチェーンソーが届く範囲内に頭と胴体の繋がった生物がいれば問答無用にその首をはね落とす驚異の能力“Killisake!GIRL”を有し、転校生としての特性も健在の彼女は間違いなく史上最強のモヒカンザコである。

その実力もさることながら、太く長く武骨な、しかし金色の輝きによって遙か彼方を照らしモヒカン達を導くはじまりのモヒカンの存在感を以って反骨精神と付和雷同を兼ね備えた面倒くさいことこの上ないメンタリティを具するモヒカンザコ達を束ねてみせた。

その数、何と721匹。実質、彼女こそが学園の支配者だと言って差し支えないだろう。

対するはかつてミスダンゲロスの名をほしいままにした世紀の美少女、天音 沙希。モヒカンザコになってなおその美貌は衰えるところを知らず、特にモヒカンザコ達の孔雀の羽とも言うべきモヒカンは彼女の身の丈に匹敵しうるのではないかと思うほどに長く、日本刀の刀身のように細く鋭い。

彼女の傘下のモヒカンザコの総数は47匹。一見すると首狩りあずにゃんの勢力の1/15にも満たない規模であったが、彼女の勢力には元魔人のモヒカンザコが多い。これは偶然ではなく、魔人としての矜持が元転校生にひざまずく事を拒み、自らの王を自らの学園の中から選ぶとする意志が生み出した結果だと言えよう。

なお、余談ではあるが、はじまりのモヒカンは元々は希望崎の生徒であり、いつか真理に辿り着くという恐ろしく壮大な能力の持ち主だった。それがモヒカンザコ化した事でモヒカンの真理へとたどり着き、はじまりのモヒカンと化したのだ。

従って、本来はじまりのモヒカンが天音を信奉するように首狩りあずにゃんを仕向ける筈なのだが、事実一度はそうするようにモヒカン達に命じたのだが、モヒカンそのものであるが故にモヒカンザコ達におだてられている内にその気になってしまい、天音と対立するに至ったのである。

両勢力は相手の手の内を読むだとか、能力を活かすだとか、そんな難しい事を考える暇もなく相手に向かって突撃を開始した。それがモヒカンのプライドだとでも主張するかのよう。

真っ先に敵陣へと切り込んだのは天音陣営——では味気ないので新時代ほっそりモヒカン至上主義と呼称する事にしよう——の理容師を志していた少年、アフメド太郎。

普通の魔人であった頃は髪の毛が伸びすぎた人の元へと瞬時にワープする能力を有しており、学園が平和な頃には彼のおかげで散髪要らず、しかもセンスが良いので切ってもらった後は異性から好意的な眼差しを向けられると評判で、中東生まれゆえのエキゾチックな顔立ちも相まって女子内での人気も高かった。

しかし、今の彼は一介のモヒカンザコに過ぎず、魔人としての能力はモヒカンの元へと移動する為のものとなり、手にしたハサミと理容師としての腕前はモヒカンを切り落とすためだけのものへと墮した。

狙うははじまりのモヒカンに選ばれし転校生、720の軍勢を率いる女王、首狩りあずにゃんただ一人。無数にモヒカンがいるという環境、首狩りあずにゃん自身もまたモヒカンであるという現実……それら全てが彼に味方し、一瞬にして彼女の背後を取る事に成功した。

が、ハサミを腰だめに構えて「ひゃっは一！」と雄たけびを上げたところで彼の動きは止まった。

——モヒカンを切れない！

物理的にはではなく、誰かの尊厳を踏みにじる為に髪を切る行為がかすかに残されていた理容師としてのプライドに妨げられ、はじまりのモヒカンの神々しさを穢す事をモヒカンザコの本能が許さないのだ。

震える右手を左手で掴み、何とか首狩りあずにゃんの頭上のモヒカンを切り捨てようと試みるが、左手さえも凍りついたかのように動かない。

ほどなくして、アフメド太郎の存在に気付いた一人のモヒカンザコが彼の後頭部めがけて棍棒を振り下ろした。

続いて飛び出して行ったのは尾神 浄治と野熊の2匹。

尾神は人狼としての特性を具しているが人間として生きて来た。しかし、今回の混乱が原因となって理性のタガが外れ、モヒカン人狼と化している。具体的には頭部以外に前後の両足の膝のあたりや背中、極めつけには尻尾にまでモヒカンが生えていると言った訳の分からない有様である。能力に関しては色々しょっぱいので割愛。

野熊に関しては頭部にモヒカンを生やした普通のヒグマといった風情。自分以外のものが手傷を負った際にその人物を仮死状態にする能力を有し、これによってまだモヒカンザコと化していなかった天音 沙希をモヒカンザコから守り抜いた実績を持っている。

とは言え、この戦争のような状況下で彼の能力が活かされるとは思えない。敵対者を殺害したならば頭を砕き、四肢をもぎ、前の穴も後ろの穴も辱める。それがモヒカンザコという生物なのだから。

二人の取った行動は至極単純。獣の卓越した身体能力を駆使して、突っ込んでくるモヒカンザコをただひたすら駆逐する。

更に彼らの後ろから遠距離攻撃に長けた数名のモヒカンザコが援護射撃を行う。

射撃部隊のメンバーは3名。それぞれ名を艶雅 超太郎、望月 疼、虚田 完真という。

超太郎は手にしたガスガンでモヒカンザコの顔面を狙い、目に当たれば殺せずとも完全に行動不能、それ以外の箇所にあたっても怯んでいる隙に野熊と尾神がトドメを刺してくれる。

疼と完真の二人は能力を駆使した即席コンボに成功。疼は餅の危険性を無視して蒟蒻ゼリーばかりを非難する政府に憤慨したのを機に目覚めた能力“望月の兎”で空気から握りこぶし大の餅を作りだし、その餅を完真の能力“連環重金爆鎖炮”によって相手陣営のモヒカン(男)の金玉めがけて、「転校生がなんぼのもんじゃーっ！！ テン紅茶にして飲み干してくれるわーっ！！」

などと叫びながら全力で投げつけた。

実に単純極まりない戦術であるが、特殊な能力を持たない陣営のモヒカンザコ共は棍棒を投げつける事で接近せずに倒す戦術を編み出し、大勢の相手をし続けて疲労困憊の5人の脳漿をぶちまけるまでに234人ももの同胞を失った。

先の戦いによって数名の聡明なモヒカンが正面突破を試みるだけでは消耗戦に陥るだけだと判断し、片や数名の魔人が、片や100人単位のモヒカンザコが相手の左右並びに後方に迂回して打撃を加えるべく動き出した。

彼らを横目に見ながら、未だに最大勢力を誇るはじまりのモヒカンあずにゃん派正面突破組の前に一人のモヒカンが立ちふさがる。禿げた頭の上にWモヒカンを戴き、目の下の666の刺青がやたらと目を引くへびっぽい雰囲気のある男。

通称、アナコンダウォリアー。優れた体術と手近にいる自分以外の生物を盾にする“王蛇盾攻”という能力を用いる生存能力の極めて高い魔人である。彼の心のありようは典型的なモヒカンザコであり、本来ならば単身敵の前に躍り出るような愚は犯さない。

ならば、なぜ彼がこのような行為に及んだのか？

「てめえら！そいつの頭も叩きわっちまえー！！」

「「「ひゃっはー！」」」

と、野熊達を倒した時と同様に手にした棍棒を投げつけるモヒカンザコ達。

しかし――

「ひゃ……はー？」

アナコンダウォリアーめがけて投げつけた筈の棍棒によってモヒカンザコの一人の頭蓋が砕かれた。薄れゆく意識の中で、ぼやけて行く視界の中で茫然と彼を見つめる仲間のモヒカンザコ達の表情を目の当たりにしたものの、結局彼は己の身に何が起きたのかを理解する暇もなく力尽きた。

手近にいる自分以外の生物を盾にする。先に述べた通り、それがアナコンダウォリアーの能力である。そして物理的に可能であれば攻撃を仕掛けて来た本人で受ける事も可能なのだ！

彼にとって飛距離が短い上に鈍い棍棒の投擲などというのは最高に対処しやすい攻撃の一つであろう。そして、身のこなしにも腕力にも覚えのある彼は必要とあれば盾にした相手を投げ飛ばすくらいの腕力は持ち合わせている。

ようやく相手の恐ろしさを理解して怯むモヒカンザコ達に向かって、アナコンダウォリアーは軽く首を傾げながら挑戦的な笑みを浮かべ、手招きをした。

時を同じくして、左右に分かれたはじまりのモヒカンあずにゃん派一行(右)の前に奇妙な光景が飛び込んできた。

2人のモヒカンがそこにおり、一人は全裸で四つん這いになって屈辱にむせび泣いていた。彼に屈辱を与えている原因は彼の肛門をいきり立ったご子息で執拗に攻め立てる男であろうことは誰でも容易に理解出来る。

しかし、問題は彼らが何故 仲間内で犯し犯されているのかという事である。

単に趣味だと言ってしまうえばそれまでの話であるが、今は戦争の真ただ中で、仲間割れなどしている場合ではないはずだ。

「何でお前がこんな事になったか分かるか、屋形くんよお？！」

「ひッ、ひぎい!？」

「分かんねえなら教えてやるよ! それはなあ、お前があっちのモヒカンに見とれていたからなんだよお!」

そのやり取りで、はじまりのモヒカンあずにゃん派のモヒカンザコ達は全てを理解した。

同時に、自分達が犯されている屋形という男を救助すべきである事も認め、モヒカンらしくグダグダ考えるよりも先に屋形に乱暴に腰を打ちつける男へと殺到する。

その直前にはレイプを満喫していた男——名を逢木 礼撫という——は即座に妙に気の抜けた男根を引き抜き、応戦しようとするが時すでに遅し。四方をモヒカンザコに取り囲まれた彼は何も出来ずに撲殺された。

モヒカンザコの一人が裸一貫の彼のもとへ駆け寄り、紳士が女性にコートを貸すのと同じ要領で優しくトゲつき肩パッドを装着しつつ、覗き込む。

「おい、大丈夫か? ひゃっはー! してみろ」

「ひゃ、ひゃっはー……!」

「もっと勢いよくだ! ひゃっはー!」

「ひゃっはー! ひゃっはー!」

その言葉を口にしていない内に徐々に余裕を取り戻し、モヒカンザコ達の助けを借りながらもよろよろと尻が痛むのを堪えて立ち上がる屋形。

モヒカンザコなりにお礼を述べようと口を開いた直後、彼の肉体が肛門の辺りから不気味に歪み、そこを中心に数十メートルの範囲を巻き込む大きな爆発は巻き起こる。

それが礼撫の能力“生命の奇跡”の効果によるものだとはだれ一人気付くことはなかった。気付く暇はおろか、自らの死に気付く余裕すらもなく爆死した。

“生命の奇跡”は自らの精液を時限爆弾にする能力であり、爆発までに要する時間は1時間。本来ならばモヒカンザコが彼らを見つけた時に精を注いでいたとしても間に合うはずもない。

ならば何故あのタイミングで爆発したのか?

答えは簡単。1時間前には既にレイプされていたから。

モヒカンザコ達は引き抜かれたイチモツが妙に弱々しかった時点で、彼らの振る舞いに違和感を抱くべきだったのだ……!!

そして当然のようにはじまりのモヒカンあずにゃん派一行(左)の前にもモヒカンザコ魔人が立ちふさがっていた。

こちらの魔人は計4名。右からスミオ、田中ロマンチスト斬美得留、経流 逝神。

そして、最後の一人はモヒカンザコ達が女帝と崇める首狩りあずにゃんその人であった。

モヒカンザコ達に衝撃が走る。何故、何故俺達の女帝があちら側にいるのか?

当然のように魔人の能力による変装の可能性が脳裏をよぎる。しかし、考えてみると最初から首尾一貫してあずにゃんは天音達の味方であったような気もしてくる。

自らの記憶がおかしなことになっていると気づき、混乱するモヒカンザコ達。

それはスミオの能力“過去日記”によるものなのだが、自分の記憶に疑いを抱くというのはモヒカ

ンザコでなくともなかなか難しいもの。こうして困惑する彼らの前へと首狩りあずにゃんが逝神を伴って歩み出る。

「お前ら！ この契約書にサインしろ、ひゃっはー！」

差し出された契約書の「内容は今から30分の間だけ死なないようにしてやるよ、ひゃっはー！ ただし、それを過ぎたら致命傷を負ってなくても死ぬぜえ〜！」というものであり、これは書面通りの効果を持つ逝神の能力“先刻の宣告”を発動させる為に必要なものである。

何やら物騒極まりない内容ではあるが女帝に言われたのでは仕方がない。それに3人も魔人と思しき輩がいるのだから契約しておいて損はないだろう。

記憶の混乱もあって、女帝に精神的に依存しきってしまったモヒカンザコ達は次々と契約書にサインする。5分ほどで全員が契約書にサインを終えた。

それを回収し終えたところで、宣教師風の男、斬美得留が高らかに言葉を紡ぎ始める。

「お前ら！ 俺達は同じモヒカン仲間じゃねえか！ だったら争う必要なんてねえ！」

雄々しく、荒々しく、力強く、モヒカンザコが神に望むものの殆どを兼ね備えたかのような声だった。

「お前らは騙されているんだ！ お前達が女帝と崇める方と俺達の女帝は夫婦だったじゃねえか！ 思い出してみろ！」

女帝、首狩りあずにゃんを見るモヒカンザコ達。女帝は威厳たっぷりに頷いて見せる。それを見届けてからモヒカンザコ達はお互いに顔を見合わせ、再び斬美得留を注視した。

迷える子モヒカン達の救いを求める眼差しを一身に受けながら、斬美得留は拳を天高く掲げて猛々しく叫ぶ。

「さあ、てめえら！ 俺達の心を惑わしやがった偽物を消毒しに行くぞお！！」

直後、「ひゃっはー！」と意気衝天の雄たけびが希望の泉に響き渡った。

踵を返して正面の戦場へと駆けてゆく首狩りあずにゃんが天音陣営の魔人、欲出来田弟が自らの能力“羊の覆い”で変装したものであると気付かずに。

左右からの挟撃を狙う集団が見事に任務を失敗したその頃、正面突破を試みるモヒカンザコ達はたった一人の魔人のために攻めあぐねていた。

アナコンダウォリアー。彼一人が最前線に立ち、何とか彼をかいくぐって来たモヒカンザコを後方にてそこそこ強いが能力が微妙な剛淫那麗否と、対象を意図する方向とは逆方向に動くようにする能力を持つ小学生魔人の園城寺ウララを中心としたモヒカンザコ達が追い返す。

アナコンダウォリアーを避けて棍棒を遠投したところで、流石に魔人には当たるはずもなく、下手をすれば人間のモヒカンザコにすらも叩き落とされて武器を奪われてしまう始末。

しかしながら、ただのモヒカンの集団にこれといった策があるはずもなく、突っ込んで行っては盾にされ、叩き潰され……を繰り返している内に辺りには屍の山が築かれていた。

既にアナコンダウォリアー達に倒されたモヒカンザコの総数は104名にもなり、生き残っているモヒカンザコ達の中には戦意喪失して逃亡をこころ見ようとするものさえ現れた。

敵に背中を向けて走り出す数名のモヒカンザコ。彼らに続くようにひとり、またひとりと敵前逃亡を繰り返す。

そんな中、ついにはじまりのモヒカン戴く女帝、首狩りあずにゃんが重い腰を上げた。

まずは逃げ惑う味方のモヒカンザコを一閃。

瞬く間に17名ものモヒカンザコを絶命させた彼女はチェーンソーを掲げて揚々とアナコンダウォリアーの元へと歩いて行く。

「お前ら、俺様に殺されたくなかったら前に進め！お前らに与えられているのは前進と勝利と略奪と死だけだあ！！」

「「ひゃ、ひゃっは一！」」」

斬首と脅迫。その2つによってモヒカンザコ達の心を恐怖で縛り上げた首狩りあずにゃんは、魅力あふれるモヒカン揺らして自ら敵陣へと突っ込んで行った。

チェーンソーを振りかぶる彼女に反応して敵勢力のモヒカンザコを引き寄せつつスウェイバックするアナコンダウォリアー。モヒカンザコの胴体が両断される。首狩りあずにゃんは彼を無視して奥に控える剛淫那麗否達へと駆けてゆく。

その彼女の横っ腹に一撃見舞ってやろうとモヒカンザコの上半身を掴んだところでアナコンダウォリアーは自らの肉体の異変に気付く。首が焼けるように熱い。視点がいつもより低い。自分の胴体を見上げている。

要するにチェーンソーをかわしたにも関わらず、彼は首を落とされて死んだのだ。

今や天音陣営にいるのは30名のモヒカンザコとたった3人の、お世辞にも強いとは言えない魔人のみ。どちらも転校生を殺傷する手段は持ち合わせていない。

加えて、アナコンダウォリアーの死をきっかけに勢いづいた165匹のモヒカンザコが後ろから迫って来る。

もうおしまいか……と思われたその時、

「ひゃっは一！偽物は消毒だー！」

けたたましい怒声と共に、100+4名のモヒカンザコが全力疾走で首狩りあずにゃんとモヒ

カンザコ達へと突撃。 戦場は瞬く間に乱戦の様相を呈するに至った。

スミオは即座に過去日記で他のモヒカン達の過去を改ざんし、首狩りあずにゃんの化けた弟の姿に困惑するモヒカン達に斬美得留が語りかける。

逝神は戦場から距離を置いて天音の下へ。彼女の無事を確認して、ほっと溜息をつく。

彼の手にした契約書が次々と黒々と焦げては消えてゆく。戦場からモヒカンザコ達が「ひえ〜、ゾンビだーっ！」と怯える声と断末魔が風に乗って彼の耳に伝わる。

こうして一歩引いた所から状況を見る限り、現在生きているモヒカンザコは敵味方含めてもう100名もいない。特に転校生である首狩りあずにゃんの力は圧倒的で、雑兵をひたすらなぎ倒すゲームか何かのように迫りくるモヒカンザコの首を刎ねまくっている。

敵も味方もお構いなし。チェーンソーを振る、首が飛ぶ。またチェーンソーを振る、またしても首が飛ぶ。淡々とその作業を繰り返しながら、この短時間で、それも単独で50人近いの屍を積み上げてしまった。

否、実際には既に100人を超えていた。逝神の手にした契約書は既に一枚残らず燃え尽きており、首を失ったまま方向が定まらず落ち着きなく歩きまわっては同じ首なしの死体にぶつかり、あるいは生首に躓いて転んでいる生き屍の数は70を上回っている。

あまりにも現実感を欠いたその光景を前に、もはやモヒカンザコが敵味方を問わずほぼ全滅してしまった状況を前に、何とか生き残った魔人モヒカンザコの背中を眺めながら、静かに笑みを浮かべた。

契約の30分が経過。生ける屍はただの死体に戻り、崩れ落ちた。

乱戦を生き延びた新時代ほっそりモヒカン至上主義派は天音とウララ、麗否、スミオ、斬美得留、弟、逝神、そしてただ運が良い程度で戦闘能力は普通のモヒカンザコ並みかそれ以下の棲獄 追照の8名。

対するはじまりのモヒカンあずにゃん派は首狩りあずにゃんただ一人。もはや派閥の体を成していないと言わざるを得ない状況だった。

それでも彼女は無限の戦闘力を持つ転校生。まともに倒す術は存在しない。

現在の生存している魔人達の中で彼女を何とか出来る手段はウララ的能力で相手の動作を狂わせて自滅を狙う。さもなければスミオで過去を改ざんし、斬美得留でうまく説得するか。

どちらも転校生の精神力と判断力の前では不安の残る戦術である。

それでも、それでも彼らはそのわずかな可能性に賭けるしかない！！

「ひゃっはああああああああ！！」

真っ先に躍り出たのは巨躯が自慢の剛淫那 麗否。その後ろにウララが続く。

麗否に出来る事は無いに等しく、彼の役割が囹である事は首狩りあずにゃんにもおおよそ把握できた。

しかし、彼女はまだ麗否の能力を知らない。ゆえにカウンターの即死能力だったらどうする？という懸念が脳裏をよぎり、彼の首を刎ねる踏ん切りがつかない。

ならば様子見で脚に一本だけでも落としてみるか？

否、落してダメージを跳ね返す能力だった時が危険過ぎる。それに、一撃で殺しきれなかった時に発動するカウンター即死能力の可能性もないとは言い切れない。

面倒くさいこの上ない話だが、魔人と戦うというのは常に決して数が多いとは言い難い即死能力の影に怯えながら戦うことなのだ。

判断に迷った首狩りあずにゃんだったが、不意にある事に気付いた。

仮に即死能力やカウンター能力を持っていたとするならば、彼は先ほどの乱戦の中でそれを解放したのではないだろうか？

この思考によって確信を得ないままながらも踏ん切りのついた彼女は躊躇なく麗否に前蹴りを浴びせ、彼の内臓や背骨を破壊すると同時に後方のウララめがけて蹴り飛ばした。

麗否の巨体のせいで首狩りあずにゃんの姿が死角に隠れてしまっており、彼女が何をしたのか目視出来なかったウララは反応こそしたものの、対処しきれずに麗否だったものくを両手で受け止め、両手もろとも破壊し尽くされて事切れた。

これで残りの魔人は5人。その内一人は首を刎ねた死体が生きていた理由であり、後は変身能力とモヒカンザコ達を煽動した能力だろう。残りの二人の能力は不明であり、一人——棲獄 追照に至っては首狩りあずにゃん視点では魔人かどうかさえも定かではないといった有様。

それでも、あずにゃんは止まらない。無策と言えばその通りだが、それ以上に「煽動の為にわざわざ余計な戦力を割くだろうか？」という思いがあったが故の決断だった。

スミオは慌てて能力を使用する。が、目の前にいる相手しか見ていない彼女は記憶の改ざんを受けた事にすら気付かず彼女のチェーンソーによってコンボの相棒である斬美得留と一緒に首を刎ねられた。

その直後、チェーンソーを構え直す暇も与えずに逝神が凄まじい速度で迫る。それも左手にウララを担いだまま。

あずにゃんの動きが止まる。果たしてあれは本物なのか？

もしかしたらさっき倒したウララこそ偽物のウララだったのではないだろうか、と。

思考時間が逝神にチャンスをもたらす。チェーンソーを振るほどの時間は無かった首狩りあずにゃんは遅ればせながらにとっさに後ろに飛んで攻撃をかわそうとするも、何故か前へと勢いよく跳躍してしまう。

そう、彼女が先ほど倒したウララこそ、ウララに化けていた欲出来田 弟だったのだ！

殴られた衝撃で仰け反る首狩りあずにゃん。しかし、ウララの能力の影響かでは仰け反るという動作は前のめりになる転換され、逝神に更なる攻撃のチャンスを与える。

二発目のパンチを目で追いながら、彼女は3つの事を考えた。

一つは逝神があのか首刎ねによる死を無効化した能力の持ち主である、ということ。これ自体はさほど意味のない話なのだが、問題は即死能力と即死無効能力が衝突し、即死無効能力が勝ってしまったという事実にある。

次に逝神の攻撃が彼女——無限の防御力を持つ筈の首狩りあずにゃんに有効打を与えている、ということ。前述の通り、彼の能力でそれを実行するのは不可能である。それにもかかわらず、彼の攻撃が通るのは逝神もまた転校生になったという事を意味する。

転校生。首狩りあずにゃん達にとって尊敬すべき先輩とも言える人物の言葉を借りるならば、

神に愛されていると確信した存在。魔人の能力原理をより深く理解し、その力を持って途方もなく大きな野望に挑む、その権利を得た至高の魔人。

魔人が転校生へとなる方法は一つ。お互いの世界観に根差した力、いわゆる能力同士のルールを衝突させ、論理的には結論の出る筈のないその戦いに勝利する。転校生達が「認識の衝突」と呼ぶその現象が、つい先ほど彼女の“Killisake!GIRL”との衝突に勝利し、転校生の資格を得たのだ。

そして最後に首狩りあずにゃんは思った。しかし、転校生になったところで彼は自分に勝つ事は出来ない、と。

何も特別な理由など存在しない、死の否定という強力すぎる能力の代償なのか、はたまた彼自身の努力不足によるところなのか。無限の攻撃力と防御力を得てもなお、逝神は弱かったのだ。

顔面めがけて繰り出される拳をウララの能力を計算に入れながら楽々と受け止め、即座にあらぬ方向めがけて上段回し蹴りを放つ。

首狩りあずにゃんの意識下ではあらぬとしか思えない場所に放たれた蹴りは、寸分変わらずウララの頭部を砕き、その勢いのままに逝神を地面へと叩きつけた。

戦いの中で転校生へと成長し、唯一首狩りあずにゃんに傷を付けた男、逝神。

しかしながら、彼女はそんな彼に何の関心も、興味も、敬意も示すことなく、モヒカンザコらしく「ひゃっはー！」と叫びながらチェーンソーを振って首を刎ねた。

残るは天音と棲獄 追照の二人のみ。

勝利を確信しながら、首狩りあずにゃんは一步また一步と天音に歩み寄って行く。

「ひゃっはー！」

モヒカンザコと化している天音が分相応に威嚇してみせるが、圧倒的強者である事を自覚している首狩りあずにゃんは微塵も怯む様子を見せない。

そうこうしている内に首狩りあずにゃんは天音の眼前まで迫り、軽やかな身のこなしで彼女の下あごを人差し指と親指で掴んで、くいと持ち上げるとモヒカンザコに変じてなお潤いを保ち、艶やかな彼女の唇を強引に奪った。彼女はモヒカンの中のモヒカン、はじまりのモヒカンなのだ。美少女を見かけてする事などもはや説明するまでもない。

一方の天音 沙希も既にモヒカンザコであり、モヒカンであろうと何であろうと女性である事に違いないあずにゃんが自ら奉仕してくれるこの状況に不満を抱くことなどあるはずもない。モヒカンザコという属性自体の男性性と本体の性自認がいびつに混ざり合った結果生まれたこの異様ではあるが美しい百合世界。

ただ一人、それを拝む事の出来た三国一の幸運男、棲獄 追照は興奮のあまりに体中の全ての血液を鼻血として放出し、満面の笑みを浮かべたまま絶命した。

モヒカンザコの世界で一番美しいものはモヒカン同士のレズなのだから仕方がない。

そんな彼の事など気にも留めず、唇を離れた首狩りあずにゃんは天音に語りかける。

「ひゃっはー？」

二人の目が、合った——。

「ひゃっはー！」

「ひゃっはあ！」

二人の瞳が、輝いた。

「俺様は、お前が好きだ。レズなんだぜえ——」

「俺もお前が好きだ。レズで構わねえ！」

天音 沙希は石野 梓の胸へと飛び込んで——、

死屍累々たる学園の中で、二人のモヒカンザコの恋がいま始まる——。

戦闘破壊学園ダンゲロスw

この変な名前のゲームを始めるまでは、
私がこれほど掲示板を見る事になろうとは夢にも思わなかった。

まずは【概要・醍醐味】を読んでみるとウォーシミュレーションだそうな・・・。

【はじめてのダンゲロス】良くできていて、面白い。

【初めての人向けQ & A】なかなか分かりやすくて新規に優しそうだ。

駒を自分で作れて、自由に能力を決めれるのが魅力だな！

うし、いっちょ参加してみっか！

こうしてダンゲロスの世界に足を踏み入れる事となった私だが、

キャラの能力を作るのにルール2.0をざっと読んでみても分からない事が色々ある。

難しいし、なにより全部読むのが面倒だった。

しかし私は全くもって悲観していなかった。

なぜなら、【初めての人向けQ & A】にも能力計算はGK（ゲームキーパー）に任せてOK

さらに古参プレイヤーにもGK任せの人がいるとのことで、

発動率計算はGKに丸投げできると知っていたからである。

それに、大概のゲームは実際にプレイする方が手っ取り早くルールを覚えれるからだ。

じゃ、キャラ作るか！

ん～さっさと死ぬのは御免だから、後方から攻撃するスナイパータイプにするかな～。

え～っと適当に数値を割り振って、発動率は希望書いてGKに調整を任せてっと・・・。

がが

■キャラクター名：トイレの花子さん

■攻撃：5 ■防御：5 ■体力：5 ■精神：5 ■F S：10

効果：敵ステータス減少

範囲：敵方向4マス直線上の先頭1体

時間：一瞬

制約：味方（男）ステータス消費

同マスの味方ステータスから1つをn消費して、敵の同ステータスをn減少させる。

（味方攻撃力-5・敵攻撃力-5）

効果対象が複数の場合はランダム1体

～初心者で計算式が良く分からないので、発動率計算よろしくをお願いします～

っと、これでメールはOKだな。

後日・・・、ピコ～ン！メールが届く。

~~~~~  
ももじさん、はじめまして！第五回自重ダンゲロスLiteのGKです。

今回のキャンペーンの発動率計算は特殊で、

希望発動率がそのまま最終的な発動率として採用されます。

なので、このキャラの能力の発動率は計算なしで90%となります。

キャラクターはこれで確定なので、陣営掲示板へ誘導させていただきますね。

ももじさんの陣営は「生徒会」です。

~~~~~

1: 作戦会議スレ(665) / 2: 雑談スレ(55) / 3: スタメンのステ(2) / 4: スタメン提出スレ(7) / 5: 生徒会キャラ公開スレ(25) / 6: GKへの質問スレ(17) / 7: 番長グループキャラ公開スレ(23)

ほえ～、そのまんまでOKなのか。さて、どんなキャラがいるのかな～？

ふむふむ、掲示板をしてみるに、意外と私のキャラ強いんでないか？

お、作戦会議スレか～ここで作戦立案するんだな～色々考えてみよ～

初めての作戦会議に私の心は躍った。

「あれこれ作戦を考える」のが私の目当ての一つでもあったからだ。

3～4日ほどはコンボやら、新しく追加されてくる味方にワクワクしたりして面白かった。

しかし、そうこうしている内に決戦前日にも関わらず、スタメンが未決定ではないか。

あれ？スタメンなんて前日にはほぼ決まってるんじゃないのか？

ま～直前で追加されたキャラが作戦を覆すかも知れないしな～

スタメンは当日の昼間に決めるのかな～掲示板に参加できないな～残念だ><

決戦当日、不安なまま日中を過ごした私だが、夕方になってもスタメンが決まっていない。これはマズイと思ったが、いかんせん初心者。

何を基準に選んで良いやら、さっぱり分からない。そして全然、決まらない。

これは、古参プレイヤーが新人研修のためにあえて掲示板に参加しなかったのか、多忙だったのか分からないが、ほとんど新規の者たちだけで、あ〜だこ〜だ言っていたので、詰めになると良く分からないという事態に陥っていたからである。

さすがに見かねた古参プレイヤーが開始寸前に最低限の知識を授ける。

あ、重要なことを言うの忘れてました。

当日の本戦中のバタバタを軽減するために役割を決めておきましょう。

- ・提出係：行動提出をまとめて提出する係。超重要。
 - ・GKコール：処理がおかしいところや、質問などをGKに聞く係。超重要。
 - ・タイムキーパー：提出時間に遅れないようにみんなに時間を知らせる係。超重要。
 - ・その他：作戦考えたり掲示板を盛り上げたりする。超重要。
-

とりあえず、今決めることは以下でしょうか。

左から優先順位高い順番かな

- ・役割分担・スタメン・誰をリーダーにするか
-

古参プレイヤーがようやく作戦会議に交じったので、なんとか役割とスタメンは決まった。

■スタメン提出

尼崎 皆内 二回動 防人 【花子】

いやほ〜い！自キャラがスタメンだ^^v

しかも成り行きでリーダーになったぜ！！

私が生徒会長だ〜やった〜！><

ん？なにになに？ラジオがあるのか？

む、ステ管画面だと？GKコールチャット？行動提出スレ？

え？この画面見とけば良いのか？

やべっ！相手のステータスをメモ帳に出しておかねばっ！！

うおおお！！やる事多いっ！！！！

なん・・・だと・・・もう行動提出の時間だ・・・と・・・

兎に角、パニックだった。

相手の行動提出後に盤面がどうなっているかを確認するのに有効なのはwikiだったが、

wikiを待っているのは作戦を立てる時間がない。

仕方なく、紙に盤面状況を書いてみたりもした。

しかし、まず今、相手の行動によって何が起こったかを理解すること自体が大変なのだ。

そんな状態で作戦など立案できるはずもなく、

誰かの提案に同意するにも、提案自体を1つ2つ理解する間にもう時間が来るのだ。

それでも、可能な限り頑張ってみた。必死に戦局を追ってみた。

ビールが6本空いたにも関わらず全く酔っていないかの様だった。

結果・・・

ダイスの目により敗北。

くそ～負けた！！！！TT

でも楽しかったな～！！

良い酒、飲めたぜ！！

翌日、相手陣営の掲示板見てみたり、作戦ラジオを聞いてみると、
自キャラを含め生徒会キャラがディスられているではないか！
なんでも、あり得ない発動率になるらしく、酷いキャラだ～とか言われていた。

そんなもん知らんがな！！

GKにお任せで大丈夫って事だから送ってOK貰ってるんだし、
ケツの穴の小せえ奴らだな～ファック！
GKが最高ルール責任者なんだから、文句タラタラ言ってんじゃね～ぜ！

さらに後日、ルール2.0を熟読してみる。

うん。まあ、確かに発動率は訳分からん事になりそうだな・・・。
でも初心者だし基本的な強さなんて分からんしな・・・。
ま、次回はちゃんとルール内でマンチキンしてやるぜ！！
まずは強キャラを作るためにルールをしっかり理解せねば・・・。
お、新たなキャンペーンが！

こうして私は、戦闘破壊学園ダンゲロスの世界にハマって行くのであった。

本文：momoji (<http://www.pixiv.net/member.php?id=2877016>)



【世界観】架神BOX版準

拠 (<http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/ASIN/4062837595/cagamiworks-22>)

【変更点】(1) 邪賢王が女性化 (2) ファーティマ・アズライールが女性化 (3) 名称変更 (一ノ瀬蒼也→一ノ瀬屠殺彦)

【その他】挿絵は左上から、怨み崎Death子、黒鈴 (未登場)、友釣香魚、一刀両断、鏡子、天音沙希 (未登場)、邪賢王ヒロシマ、あげは

1、

2010年8月10日 午前10時半

「暑あついのう～～」

立ち込める熱気と異臭の中で、希望崎学園番長、魔人邪賢王ヒロシマ (じゃけんのうひろしま) は遂にたまらず吐き捨ててしまった。彼女の周りの不良たちは既にうだつた姿であちこちにへたばっている。

ここは私立希望崎学園、——通称「戦闘破壊学園ダングロス」の敷地内片隅にある番長小屋。番長グループの不良魔人どもがたむろするダングロスの万魔殿である。窓一つない薄暗い室内の奥に鎮座するは、ロリっ娘番長邪賢王ヒロシマ。周りの番長グループの不良たちがへたばっているのは真夏の盛りの暑気に当てられたこともあるが、加えて、彼女——邪賢王ヒロシマから漂う異臭によるところもあった。

この美少女番長は、腕っ節の強さに加えて、その溢れる男気と硬派でも知られており、真夏日にもかかわらず身につけている暑苦しい長ランは、希望崎番長に代々伝わる数十年間洗濯されていない由緒正しき代物である。また、血と吐瀉物にまみれた不潔な肌着も、なんと三年もの間一度も洗濯されていない。実にこれほどの硬派ぶりであった。さらに彼女自身も週に一度しか風呂に入らぬという男ぶりであったため、その五体からは類まれなる異臭が立ち込めており、有り体に言って、彼女はとても臭かった。

さりとして、いかんせん美少女である。五体から発される香りが如何ほど強烈であろうと、盛り

のついた男子高校生魔人たちが彼女に勃起せぬわけではない。むしろその悪臭すらも何やらかぐわしく感じられて、わざわざ彼女の方に鼻面付き出しては、スーハースーハー、クンカクンカと胸いっぱいその香りを吸い込んで、ウウン！ ゲフンゴフン！ オゲゲーッ！などと堪らず吐瀉しつつも、自らの一物を怒張させて転げまわったりなどしていたのだが、とはいえそれも平時のことである。

真夏日の盛りである今日のような暑気にあっては、さすがの彼らにもそのような元気はなく、一物も哀れに萎んで溶けるようにへたばるばかり。サウナの如くに蒸された空間に邪賢王の異臭が立ち込め、今や希望崎学園番長小屋はダンゲロスの万魔殿どころか、アウシュビッツさながらの惨状と言えた。開け放たれた戸口の前では、番長グループ一年の野球魔人、白金虹羽（しろがねこうう）が扇風機代わりにバットを振り回し、室内に風を送ろうとしているが、これほどの熱気の前ではただ邪賢王の体臭を攪拌しているに過ぎない。

しかも、暑いから臭いからと言って、呑気にへたばっている訳にもいかない。番長グループ二年のピッチ魔人鏡子などは、このクソ暑い中、汗まみれになりながらも、へたばっている男子魔人の一物をむんずと掴んでは、恐るべき手淫力で射精させ、それを顔面で受けていたからである。三つ編み眼鏡の素朴な少女——、鏡子は口の端に付いた精液を啜っては、「暑い時こそスタミナをしっかりと摂らないとね！」などと訳の分からぬことを言っているが、貪られている不良たちからすればたまったものではない。平時でさえ鏡子の性技を三分も受ければ半日は動けぬ有様だ。それをこの猛暑の中でやられては、命の危険さえ覚えるところである。彼らは、あひ一、うひ一、などと唸りながら、這いずり回って必死に鏡子から逃れようとするが、それ、今もまた不良男子の一物が彼女の魔手に掛かったところだ。

と、そのような空間なのだから、不良学生たちもさっさと家に帰ってクーラーでもつければ良さそうなものだが、それでもここに居続けるのは、やはり番長小屋が彼らにとって居心地の良い場所であり、また、番長グループの面々が互いに気のおけぬ仲であるからに他ならない。

だが、あの男気溢れる美少女番長、邪賢王ヒロシマが先程思わず、「暑あついのう～～」

などと弱音を吐いてしまったが如く、今日の暑さばかりは甚だしきものがあつた。

「邪賢王ちゃん、今日はなんだかおかしいですね！」

「温度計も驚きの39℃オーバーですね」

と、グループの不良たちも声々に言う。ちなみに東京都で観測された最高気温は2004年の39.5℃である。

「むう、そうじゃのう……。わしもさすがにたまらんわい」

美少女番長もロリ声で呻いた。

「どうするかのう。皆でかき氷でも作るか？」

「邪賢王、それは一時凌ぎだ。抜本的解決にはならないと思うぞ」

番長の横に座っていた男——、副番長白金翔一郎が異を唱えた。彼は番長グループのナンバー2であると同時に希望崎学園男子剣道部主将でもあり、先月の魔人玉竜旗大会では学園を優勝に導いた程の達者であったが、今日は部活も休みらしく、朝からここに座っていた。腰まで届く長髪をまとめ、眉目秀麗で涼やかな容姿の彼も、さすがにこの熱気の中、全身汗みどろである。

「いっそのこと、みんなで海水浴にでも行った方がいいんじゃないか？」

「海水浴——ッ！」

と、白金の提案に素っ頓狂な声を上げたのは、魔人服部産蔵である。邪賢王、翔一郎と同じく番長グループの三年生であり、さらに剣道部では副将を務める程の手練であるが、顔面が非常に残念な上に、女性を前に過度にキョドるなど、立ち居振る舞いも童貞臭丸出しで色々気持が悪いため、全くモテない。そんな彼が海水浴と聞き、女性陣の水着姿を妄想して思わず射精したのも致し方のないことであった。

「海水浴ッ！ いいですね、海水浴——ッ！」

産蔵が妙に高い声で、気持ち悪く連呼するが、

「しかしのう——。この暑さではみな考えることは同じじゃろ。行くなら千葉の九百九十九里浜辺りじゃろうが、今日など芋荒い場も同然じゃろうて」

邪賢王ヒロシマは難しそうに首を傾げる。発案者の翔一郎自身も、そうさなあ、と難色を示したが、

「あら、大丈夫よ——」

翔一郎の隣で、彼にもたれかかっていた女子——口舌院言葉（くぜついでんことば）が朗らかに言った。

「だいじょうぶ、私に考えがあるから」

彼女の申し出に、邪賢王と翔一郎は互いに顔を見合わせていたが、ややあって、こくりと頷いた。言葉が何をすつもりか分からないが、彼女が言うのなら間違いないだろう。他でもない。希望崎学園最強魔人の一角、口舌院言葉がそう言うのだから――。

2、

2010年8月10日 午後0時

「ほ、本日は……き、希望崎学園、番長グループの皆様がビーチにいらっしゃいます。よ、用のない人は、荷物をまとめて、直ちにおうちに帰りましょう。繰り返します。本日は……」

上ずった声がどもりがちに警告を繰り返す中、邪賢王たち番長グループ一行は無事、無人の九百九十九里浜へと到着していた。これほどの海水浴日和にもかかわらず見事に誰もいない。人っ子一人いない。青い空。輝く太陽。打ち寄せる薄汚れた波。そして、慌ててビーチを引き払った海水浴客たちの私物が、あちこちに点々と残されているばかりである。

「ね、言ったでしょ？ 大丈夫だって」

「はぁ……。わしらの悪名も使いようはあるもんじゃのう」

「他の海水浴客には悪い気がするけどな……」

目の前の惨状に白金は呆然と呟いた。口舌院言葉は無辜の市民を装って市役所に一報入れたただけと言うが、それだけでこの有り様だ。実際には至ってのんびりとした、牧歌的とさえ言って良い希望崎学園番長グループであるが、まだまだ世間での評価はこの通りである。千葉県は県の八割が暴走族という文字通りの暴走半島であるが、それでも魔人学園ダンゲロスの名を聞けば、彼らとてこれこの通り、尻尾を巻いて逃げ出さずにはいられない。

「学園が平和になってからもう二年も経つのになぁ……。まだこんな状況か……」

「まあまあ。そういうことはド正義会長に任せましょうよ。ほら、白金君、せっかくガラガラなんだし、遊びましょ」

「しかしのう、言葉……。」

邪賢王はガラガラになったビーチと、そして、無人の海の家を眺めて、

「これはこれで困ったのう……」

と、呟いた。見渡すかぎりどこも閉店している。嚴重な戸締りがなされ、中には入り口を鉄板で打ちついたり、有刺鉄線で全体を囲んでいる店まである。明らかに番長グループ対策だ。

「オレたちはモヒカンザコかなんかだと思われてるのか？ 酷い扱いだな……」

「これじゃあ着替えもできんし、シャワーも使えんのう。わしや男連中はまあええとしても、おどれらは問題あるじゃろうが」

美少女番長は口舌院や他の女子連中を見渡して言う。これには言葉もちょっと困ったような顔を見せたが、と、その時――。

「あっ！ 番長、あそこ、見てくませえ！」

番長グループ一年のゆとりのひでゆきが目ざとく何かを発見したらしく、前方を指さした。

「ほら、あその店、まだやってますぜ！」

「おお、本当じゃ！」

すると、確かに一軒だけ。健気にも営業を続けている海の家があった。「なんという見上げた

根性じゃ」「商売人の鑑っすね」などと、彼らは褒めちぎりながらゾロゾロと向かっていったが、その時、当の海の家からヒョいと顔を出した相手を見つけて、互いに「あっ！」と声を上げて、顔を見合わせたのである。

3、

「なんだ、お前たちか——。急に客足が遠のいたから何事かと思ったが……。そうか、お前たちが来たせいかな——」

海の家から出てきた男は、希望崎学園生徒会長、魔人ド正義卓也（どせいぎたくや）であった——。二年前、文字通りの戦闘破壊学園として知られ、荒廃の極みに達していたダンゲロス。その当時の番長グループをたった一人で壊滅させ、学園に平和と治安をもたらした救世主が彼である。いま、邪賢王ヒロシマが率いる番長グループは、ド正義による大殺戮の後に結成された組織であり、かつての邪悪に満ちた番長グループとは直接の繋がりはない。が……、

「まったく、迷惑なことだな。今日は絶好のかきいれ時だったのに——」

しかし、生徒会と番長グループの間には、ごく表面的ながらも対立関係とでも言うべきものが存在している。現に希望崎の一般学生や学外者などは「生徒会が武力で番長グループの横暴を押さえつけて治安を保っている」と認識しているのだ。とはいえ、外部の認識は別として、邪賢王とド正義などは古い友人でもあることだし、実際には双方の緊張感などあってなきようなものである。

そのド正義卓也——。普段は皺一つない制服をパリッと着こなして、眼鏡の奥の眼光も鋭く、謹厳実直、清廉潔白の生きた見本とでも言うべき堅物であるが、今日などは気楽なアロハ姿であり、健康的に日焼けしている。表情もどこか弛緩しており、イマイチ締りが無い。そして、

「——で、お前たち、何しに来たんだ？」

と、何やらとんちんかんなことまで言う。ロリっ娘番長邪賢王は腰元の浮輪をパンパン叩いて、

「海に何しに来たもなだろうが。海水浴に決まっとるじゃろう。おどれらこそ、何やっとなんじゃ」

「そっちこそ見れば分かるだろ？ ……見ての通り経営だよ。この夏はみんなで海の家をやるんだ」

——確かに。ド正義の周りにも見知った顔ばかりであった。希望崎学園の生徒会役員たちである。

ド正義いわく、彼らは生徒会活動費を捻出すべく、この夏は役員一同揃って海の家を運営していたのだという。見れば、奥では生徒会会計のファーティマ・アズライールがニコニコしながら電卓を叩いている。中東生まれの魔人である彼女は、元々の褐色の肌もさらにこんがり焼けており、ビキニ姿には収まりきらぬ豊満な胸と健康的な肢体を顕にしていた。他の生徒会役員たちも同様に日焼けしており、勤労の跡が垣間見える。

「フッフ、僕たちの海の家は様々な画期的サービスを取り揃えていてな。おかげで顧客人気も上々。高校生の休暇活動とは思えぬ利潤を叩き出しているのだよ。お前たちのせいで折角の客が帰ってしまったのは迷惑千万だが、まあ来てしまったものは仕方ない。せいぜいウチのサービスを満喫して、僕達の店に金を落としていくといい」

と、ド正義は苛立たしいのか楽しそうなのか、何やらよく分からない調子で言う。なんのかの言って旧友の邪賢王ヒロシマが遊びに来てくれたのが嬉しいのかもしれない。

「ま、他に選択肢はないし、そうなりそうじゃの。おい、ド正義。おどれの店の、その自慢のサービスとやらはなんじゃ。とりあえず、シャワーと着替え、あと、メシが食べればそれでええんじゃが」

「フフッ、食事にシャワーに着替えだと？ ま、その辺は当然だな。見ろ、食事は彼らが担当している」

ド正義が指し示したのは、海の家奥で調理に励むカレー魔人架神恭介と屠殺魔人一ノ瀬屠殺彦の二人であった。他に陸上部主将の範馬慎太郎や、副会長補佐の歪み崎絶子なども手伝っているという。まずは範馬慎太郎がその剛力で網を引き、海産物を根こそぎ集めてくる。そして、屠殺魔人一ノ瀬が、彼の能力『テキサス・マスクウル』によって海産物をパック詰めするのである。一ノ瀬は食肉や魚介類など、およそスーパーに並びそうな食材なら何でも一睨みでパック肉へと変える能力を持つ。そして、歪み崎絶子は普通にお野菜などを切り、そのままBBQにしたり、もしくは卓越したカレー調理技術を持つ架神がシーフードカレーへと変えるのである。戦闘にあっては非力な二人だが、一ノ瀬、架神の能力コンボは生徒会が飲食店を経営する際には圧倒的なパフォーマンスを発揮した。……まあ、そんな機会は滅多にないのだが。

「シャワー室とロッカールームも普通にあるが、まあ他のサービスも聞くと良い。まず、希望者にはキャンプファイヤー用の焚き木を提供している」

言われてみると、確かに海の家裏側では、生徒会最強の女子剣士、一刀両断（いとりたち）が真剣を振るって、えいっ、やあっ、と鬼気迫る勢いで薪を切断している。既に凄まじい量の薪が割られていたが、邪賢王はふと気になって、生徒会三年のエースに、

「おい、あの刀、確かおどれの親友が命と引換えに産み出した魔剣じゃなかったんか？ ええんか、あれ」

と尋ねてみると、エースは肩を落とし溜息を吐きながら言った。

「……何度も言ったが、もう諦めてる」

「そうか。おどれも大変じゃのう……」

ド正義はさらに二人の女子を指差した。日照宮日南子（ひでりのみやひなこ）と浅宮ミヅキだ。

「知っての通り、日照宮君は太陽光の強弱を操る。また、浅宮君は降雨を司る魔人だから、天候操作も思いのままだ。こちらは一時間千円で受け付けてるぞ」

「ほう、それは便利じゃのう……！ じゃが、今日は……」

「そうだな。見事なまでに快晴だ。ま、涼みたくなったら声をかけてくれ。じゃあ、あれはどうだ？」

生徒会長は、次に海面を凄まじいスピードで駆け抜ける男を指差した。男は何かを曳いている。そう、あれは……バナナボートだ！ 水着姿の高速移動魔人リンドウが、うわははは、などと高笑いしながら海面を走り抜けていく。ちなみに彼が浮いているのは、右足が沈む前に左足を、左足が沈む前に右足を、という例のアレによるものだ。

「リンドウ君による人力バナナボートだ。どうだ？ すごいスリルだぞ。時速200キロ出るからな」

「え……。じゃが、あれは……」

危ないんじゃないかのう、と、邪賢王が言った先から、リンドウはつんのめったらしく、ウギャアアと叫びながら海面の上を水切りの石のごとくに跳ね飛んでいき、最後にはブクブクと沈んでいった。生徒会長はその様子を見て、またか、と言わんばかりに溜息をついて、

「そうなんだよな……。時速200キロで転んだら水面でも結構なダメージなんだよな……。彼もボロボロになるし……客も大怪我するし……」

「それはやめた方がええんじゃないかのう……」

「あと、夜のサービスもあるぞ。爆弾魔のフジオカ君による打ち上げ花火とか」

「どうしておどれはそういう危なっかしいことばかり考えるんじゃ……」

「そして、我が海を最大の目玉！ 生徒会特性の肝試しコースだ！」

「ほう……」

しかし、最後のサービスには彼女も興味を惹かれたらしい。夜は肝試しでもしようぜ、などという話が行きの電車の中で出ていたのである。

「ほほう！ で、それはどういう趣向を凝らしとるんじゃ」

「うむ。端的に言うと、赤蝮くんを野に放している」

「それは……端的にダメじゃのう……」

生徒会副会長、赤蝮伝斎は希望崎学園でも最低のレイプ魔である。おまけに男だろうが女だろうが見境なく襲う。そりゃあ夜道にレイプ魔が徘徊していれば、恐ろしいことには間違いないが……。

「よう今まで警察沙汰にならんかったのう。……まあええ、そこら辺のサービスはノーサンキューじゃ。メシとシャワーとロッカーだけ世話してくれい」

「そうか。他にもサービスは取り揃えてるんだがな……。ロッカーは奥にある。男はあっち、女性用はその先だ」

何やら残念そうなド正義はさておき、邪賢王は番長グループの皆に指示を出し、各自ぞろぞろとロッカールームへ向かっていく。

「ん？ 邪賢王、お前は行かないのか？」

「わしはここでええ」

そう言って、邪賢王は異臭を放つ長ランとズボン、血と吐瀉物でゴミのように汚れた肌着をボンと脱ぎ捨てると、さらしにふんどし姿となった。どうやらこの姿で泳ぐ気らしい。なんという男気だろうか。

「そ、そうか。手軽でいいな……」

「うむ！ ……ん。オイ、ド正義、あれは……」

と、その時。

邪賢王が何かを発見した。

彼女が指し示す指先を見ると、なんと、空中に浮かぶ二つの眼球が……。フラフラと女子ロッカールームに向けて漂っていく。眼球を操る魔人といえ、番長グループ二年の夜夢アキラに違いない。命知らずにも彼は番長グループの女子たちに対し覗きを企てたようだが……。

邪賢王ヒロシマはその眼球を取っ捕まえようと身を乗り出した。しかし、その動きをド正義が制して、

「問題ない！ さっきは言いそびれたが、我が生徒会のサービスとして……」

その瞬間、漂う眼球を二つの剛腕がガッシリと掴んでいた。

生徒会三年、エースと範馬慎太郎である。

そして、両名は海へ向かってかけ出すと、どっせーい！の掛け声と共に、遙か沖の彼方へと、範馬は眼球を投げ飛ばし、エースは眼球を蹴り飛ばした。同時に男子更衣室からフルチンの夜夢アキラが「ぎゃあああ！」と悲痛な叫びと共に飛び出してきて、必死に眼球を追いかけていく。

「ああいう不埒なバカの対策も完璧だ。ハハハハ、女子諸君は安心して着替えるがいい！ ハハハハ……！」

ところで、夜夢は己の眼球を500mほどの距離まで操る魔人である。然るに、先程、範馬とエースにより眼球は優に数キロ先まで飛ばされている。あれは何気に洒落にならんのではないかのう……、などと少し心配になる邪賢王であった。

4、

ぶっぴょーん。ぼいーん、ぼいーん。

と――。

突然の強風に煽られて、口舌院言葉の豊満な乳房が揺れた。

「ちょっと、虹羽くん、やめてよー」

言葉はキャハハと笑いながら虹羽を叱る。先の強風は、彼の素振りにより巻き起こされたものだった。野球魔人、白金虹羽は海水浴にも関わらず金属バットを持ち込んで、浜辺で素振りをしていたのだ。しかし、彼はなんとという姿だろう。辛うじて水着こそ着ているものの、頭には野球帽をかぶり、あまつさえグローブまで持ってきている。この男、一体海へ何しに来たのか。虹羽は「スイマセーン」と反省の色なく頭をぺこりと下げたが、

「ぐえへへへ……。たまんねえぜえ……」

と、彼の横で下卑た笑みを浮かべる一人の少年がいた。白金虹羽の親友、ゆとりのひでゆきである。

「おい、虹羽。見たか。今のぼいーん、ぼいーんっての。うひひひ、お前が友達で本当に良かったぜええ～～！」

「なあ、ひでゆき～。こんなことより野球しようよ」

「バカ、お前、何しに海来てんだよ。海水浴ってのはアレだろ。女子の水着姿を堪能するためのイベントだろ」

「そうかなあ……？ そんなことより野球しようよ」

ゆとりのひでゆきは先程から虹羽に突風を起こさせては、それで揺れる女子の胸元に鼻の下を伸ばしていたのである。しかしまあ、この程度なら魔人男子高校生の性欲としては、まだまっとうな部類に入るだろう。

だが、そこに一人の男が現れた――。

「フッ、幼稚なやつらめ」

「お、お前は、歩透（あゆみとおる）――！」

歩と呼ばれた少年は、ゆとりのひでゆきの企てを看破し、一笑に付したのであった。彼はひでゆき、虹羽と同じく番長グループの一年生であった。その彼が、視線に哀れみさえ込めて、ゆとりのひでゆきにこう言うのである。

「おい、ひでゆき。お前はその程度で満足なのか？ 風で揺れるおっぱい程度で、お前はこの夏を悔い無く終われるのか？」

「いや。だってよ……。さっき覗きを企てた夜夢先輩はヒデェ目に遭ってたぜ」

歩の挑発にひでゆきはびくついた様子を見せる。現に、眼球を投げ飛ばされた夜夢アキラは、今や遙か沖合いにて、生徒会のリンドウ、友釣香魚（ともづりあゆ）と共に海底に沈んだ眼球を探すべく四苦八苦しているのだから。先輩の憐れな姿を見て、彼が怖じけるのも無理はない。

「フフッ、案ずるには及ばん。先輩のやり方にはスマートさが足りなかった。……だが、その点

、オレの能力ならもっと確実だ」

「な、なんだって！？ お、お前、まさか——！」

そういえばこいつの能力知らなかったな、などと魔人ひでゆきは思う。まさか、彼がこれまで頑として己の能力を明かそうとしなかったのは、全てはこの時のためだったのか、と……！

「その通り。オレはこの機会が訪れるのをずっと待っていたのだ……。オレの能力は『虚飾の王』と言う——」

そして、遂に明かされる歩透の能力『虚飾の王』——。それは実に恐るべきものであった。彼は他人の身に付けている飾りを虚飾へと変更する……。簡単に言うと、他人の衣服を「ボディペイントへと変える」能力であった。今の状況で言うならば「水着の女子」を「ボディペイントを施された素っ裸の女子」に変えることができるのだ！

「オレはガキの頃からずっと思ってたんだ！ ただの全裸よりも、全裸の上から服の絵を書いたボディペイント全裸の方がずっとエロイってな！ いや、もっと言うならば、当の本人は自分は服を着ていると思いついて、そんな気付かない女の子の裸を至近距離でまじまじと見つめ、『なんでこの人、私の服をこんなにじろじろ見てるのかなあ』と不思議そうな顔をする女子の前で、ニヤつく笑顔を必死に隠したい！ それで家に帰って思い出しながらオナニーしたい！ オレは小学生の頃から毎日そんなことを妄想し続け、その結果、手に入った能力がこれだったのだ……！」

と、豪語する彼は、実兄の歩透のことを変態だの何だのと散々に言っていたが、彼自身もあまり偉そうに言える立場ではなかった。

「……ただし、オレの能力には致命的な欠陥があつてな。立体的な衣服には使えないんだ。全身タイツや水着など、ピッチリとした服に限られてしまう。だから、オレはこの機会をずっと待ち望んでいたんだ……。女子が水着姿となる、千載一遇の機会をな……！」

「なるほど！ ボディペイントに変えるだけなら、変えられた本人も気付かないから、誰も傷つけることなく、オレたちは女子の裸を拝めるってわけだな！」

「いや、気付くと思うけどなあ……」

盛り上がる二人をよそに虹羽は一人呆れ気味である。

「そのとおりだ！ 気付かない女子の面前で、オレたちは自然体を装ってまじまじと全裸を眺める！ ……つまり、完全犯罪だ！」

「完全犯罪！！」

ゆとりのひでゆきは感激のあまり、歩の手を固く握りしめた！

「歩い……。スゲエ……。お前スゲエよ……。！ お前は本当に変態だ。本当にどうしようもない変態だ！ どうしようもない人間のクズだ。お前がこれまで能力をひた隠しにしてきた理由もよく分かったぜ、お前はクズだ！ ……だが、最高のクズだ！ お前、最高の変態だよ、ブラザー！！！」

「分かってくれたか、友よ……！」

などと言って、二人は強く抱きしめあった。ゆとりのひでゆきは最高のパートナーを得て、歩透は人生で初めての理解者を得たのだ。……周りの男女からは、「ヤダ！ BLよ」「BL

だな……」などと囁かれているが二人の耳には入らない。

「よし、じゃあ、善は急げだ！ 早速、口舌院先輩とあげはちゃんの水着をボディペイントに変えようぜ！」

「おう、任せとけ、ブラザー！ オレが念じるだけで一発だ！」

「ちょ、ちょっと、待ちなよ、二人とも！」

溢れる煩悩に瞳を輝かせていた二人の間に、虹羽が割って入る。

「ホント洒落にならないから止めた方がいいよ！ 後で兄さんに殺されるよ」

白金翔一郎は口舌院言葉の恋人である。これは当然予想される展開であった。だが、二人はバカヤロウ！と声を揃えて、

「バカヤロウ！ お前、何のために生きてるんだ！」

「ここで裸を見たいという気概を失ったら！ そんなの生ける屍と一緒にじゃねーか！」

「男には命を賭けても女子の裸を見なきゃいけね一時だってあるだろ！」

「そうだ、オレたちは死んでも女子の裸を見るぞ！ なあ、兄弟！」

「おお、ブラザー！！！」

「ウオオオオオ……！！！！」

「裸見るぞ！ 裸見るぞ！」

「裸見るぞ！ 裸見るぞ！ ウオオオオ！！！！」

と、二人して大声で叫び出したので、周りの男女は「やだ、何言ってるのかしら」「きっと口くでもないこと企んでるのよ」「死ねばいいのに」などと囁いているが、やはり二人の耳には入らない。そして、

「うおりゃああ！！」

突如、ゆとりのひでゆきが虹羽を羽交い締めにした。

「ひ、ひでゆき！ 何を……！」

「歩ィ！ いまだ！ 今のうちに、水着をボディペイントにするんだー！」

「任せとけ、兄弟！」

そして、歩透は口舌院言葉の水着姿を見つめると、ぎりぎりとそれを睨みつけ、ボディペイントに変われ！ ボディペイントに変われ！と強く念じ続けたのだ！ ……これで、すぐにもビキニ姿の言葉は、全裸にボディペイントの言葉へと変わるはずであったが、しかし——
——くるっ。

その言葉は、こちらを振り向くと、笑顔のままぱくぱくと口を動かして……。

また、くるりと振り向いて行ってしまったのである。ひでゆきは、キョトンとした顔で訊く。

「オイ……、歩。あれ、成功したのか……？」

「した……と思う……………」

「でも、よく分かんねえな……」

「まあ、ボディペイントだからな……」

ひでゆきも虹羽を放して、二人してじろじろと言葉の水着姿を眺め続けるが、やはりどうにもよく分からない。ボディペイントのような気もするし、単に水着姿のような気もする。とりあえず勃起はしなかった。

「ちょっと、オレ、近くで見てくるわ……」

そう言って、歩はテクテクと彼女に近付き、わざとらしい挨拶など交わしながら胸元を凝視していたが、しばらくして首を傾げながら帰ってきた。

「オイ、どうだったんだ……？」

「いや。なんか……。成功してるはずなんだけど……。全然、裸に見えないっつーか……」

「なんだよそれ。しっかりしてくれよ」

「おっかしいなあ。ボディペイントってああいうもんなのか……。オレもこの能力、人に使うの初めてだからなあ」

と、何やらよく分からない様子で二人して首を傾げていたが、一方、彼らの周りの男女は歩の股間を見て、気の毒そうな表情を浮かべている。そのうち、波打ち際でぱしゃぱしゃと遊んでいた邪賢王までが、口舌院言葉を捕まえて、

「なあ……。歩のやつ、どうしたんかのう。あんな格好をして。何か悩みでもあるんかのう」

と尋ねてみるが、言葉はくすくす笑いながら、

「さあ？ ま、心配ないんじゃない？」

などと答えている。

——そう。歩透は全裸だったのである！

正確に言えば股間に海パン型のボディペイントをしたまま、一物をぷらぷらとぶら下げていたのだ。気付いていないのは本人とゆとりのひでゆきだけのようだったが、これはひとえに彼らの狙った相手が悪かった。魔人口舌院言葉。その能力は『騙しの美学』。舌先三寸で相手を騙し、自らへ向けられた能力を相手自身へと返す反射系能力者である。まあ、あれだけ大声で下衆な企みを喧伝していたのだから仕方がない。

「なんだよ、お前、全然使えねえなあ」

手のひらを返して、ゆとりのひでゆきは冷酷に言い放つが、全裸の歩にも言い返す言葉がない。

「ちっ。こうなりゃ後は鏡子先輩に期待するしかねえな」

期待するってどういうことだよ、と歩が聞き返す。

「ほら、鏡子先輩、ビッチだろ？ きっとすげえエロい水着なんじゃねえの？ ヒモみたいなヤツとか、人魚姫みたいな貝殻のやつとかさ」

「あー。なるほどなあ。確かに期待できるかも。……。あ、いや、でも待てよ。鏡子先輩、ビッチなのに三つ編みだし眼鏡だし、普段はすげえ地味じゃん？ 意外とスクール水着じゃねえの？」

「なあ、そんなことより、三人で野球しようよ」

「その可能性も否定出来ないなあ……。あのレベルのビッチになると常識では測り難いからなあ」

と、下らないことを言い合っていた三人であったが、その横を、当の鏡子は全裸に麦わら帽子をかぶって、トコトコと通りすぎて行くのだった。

そんな彼女の後ろ姿を見送ってから、ひでゆきと歩は「ふう……」とため息をつくと、

「……全裸か」

「全裸だったな」

「何の工夫もねえな……」

「意外と悲しいもんだな」

「裸を見たくて一生懸命頑張ってた時が、オレたち、一番盛り上がったよな」

「人生って、そういうものなのかな……」

などによく分からない諦念観に駆られていたが、しかし、鏡子は全裸でどこに向かっているのだろうか？ 全裸の彼女はそのまま沖の方へとぱちゅぱちゅ泳ぎ出し、あまつさえその後ろには、——地元の漁民だろうか？ 灰緑色をした、カエルのような顔立ちの男女を十数人も従えていた。そして、彼女が向かう先には一つの島影が——。

……あれは先月のことだったのだろうか。突如として九百九十九里浜沖に浮上した謎の奇島がマスメディアにより報じられたが、彼女の向かった先はもしやそれだったのかもしれない。

そして、現に鏡子はこの直後に姿を消し、再びこの島が海底に沈むまでの実に一月もの間その消息を絶ったのである。なお、この物語の裏には、邪神クトゥルフの復活を目論むダゴン秘密教団（と鏡子）の暗躍と、それを阻止せんと戦った集英大学TRPG愛好会の死闘があったのだが、それを描くのはまたの機会としたい。

一方、波打ち際では——、

5、

「あげはちゃん、どうしたの？」

番長グループ一年の魔人、静かなる駒沢は心配そうに声をかけた。

同じく一年生の魔人あげはが、波打ち際まで来ておきながら、ためらうような素振りを見せたのを慮ったのである。彼女はここまで来て、水着の上からまだブラウスを引っ掛けていた。

駒沢はそんな彼女の様子を見て、はたと気付く。

「う、うん……。みんなは、そんなこと気にしないって、分かってるんだけど……」

ごめんね……と、あげはは小さな声で呟いた。彼女は気にしているのだろう。両腕に残された古傷を。

大規模無理心中能力を持つ彼女——、魔人あげははかつてこしらえた無数の自傷行為の痕を全身に残している。それを衆目に晒すことを、彼女は躊躇したのだろう。だが、駒沢は、

「大丈夫だよ、あげはちゃん」

優しく微笑みかけると、彼女の手を取った。

「今日は僕がずっと一緒にいてあげるから」

「駒沢くん……」

番長グループ一年の魔人、静かなる駒沢の能力は『I.Z.K.』。「いつからいたの？ 全然気付かなかった！」の略である。彼は自己の存在感を限りなく薄めることができる。彼に触れられた者も、同じくその存在感は霞の如くとなる。駒沢の『I.Z.K.』に護られたあげはは今や誰の目にも映らないのだ。

駒沢の気遣いに、あげはは薄く涙を溜め、ブラウスを脱いだ——。

——と。

番長グループの一年生カップルが心温まる交流を見せていた頃、生徒会の女子役員二人、一刀両断（いとりたち）と怨み崎Death子はおずおずとした様子で、ド正義の前に進みでて、

「あ、あの、会長……」

と、何やら言い出しにくそうな素振りを見せていた。

そんな彼女たちの様子を見て、ド正義は「ふむ……」と一人ごちると、

「分かったぞ。キミたち、番長グループと一緒に遊びたいんだろ」

ずばりと言う。女子剣道部主将の一刀両断は男子剣道部主将の白金翔一郎と仲が良いし、怨み崎Death子も元はといえば番長グループの一員であった。

二人は心中見透かされたことに慌てながらも、

「あ、あの……、みんなが働いてる中、そんなのダメだと思うんですけど……。や、ダメですよ。やっぱり……」

などと言っていたが、ド正義は、

「いや、別に構わないぞ」

さらりと言う。

「今日は客もあいつらだけだしな。人手は足りてるし、別に遊んできてもいいぞ」

ド正義の言葉に、二人の顔色はパアッと明るくなった。しかし、

「……それに、ぶっちゃけキミたち特に役に立ってないしな。一刀両君は薪割り以外何もできないし、恨み崎君がいると子供が泣くし」

と、言われると今度は二人してどんよりと顔を曇らせた。二人とも自覚がなかったわけではない。恨み崎Death子は今にもテレビから出てきそうな戦慄的面構えだし、一刀両も海の家裏手に、もうアホのように焚き木を積んでいた。

「うん。大丈夫だ。キミたちがいなくても何も困らない。僕たちで海の家はしっかり回すから、心置きなく遊んでくるといい」

ド正義は他意も悪気もなく、明るく爽やかに言い放つ。

「そ、そうですね……。じゃ、じゃあ、スイマセンけど。私たち、ちょっと行ってきます……」

二人はトボトボしながら海の家へ入り、しばらくして水着に着替えて浮輪を持って出て行ったが、そんな彼女たちも、Death子はビーチバレーに混ぜてもらって、一刀両は白金とスイカ割りなどしているうちに笑顔が戻ってきた。ド正義はそんな二人の様子を微笑ましげに眺めていたが……、

「オイ、ド正義」

不意に横から架神に突つかれる。

すると、彼も何やら言い出しにくそうな様子である。

「ん？ どうした、架神君？」

「なあ……。オレ、前々から思ってたんだけどよ……」

「ふむ」

「お前も特に役に立ってねえから遊んできていいぞ。お前、何もできねえし」

「……………」

——数分後。

そこには番長グループに混じって遊んでいる生徒会長ド正義卓也の姿があった。

6、

楽しかった夏の一日も終わりを告げようとしている。

ギラギラと照り付けていた太陽も姿を隠し、辺りにはうっすらとした暗闇が差し掛かって、風もずいぶん涼やかなものになっていった。九百九十九里浜に、短い夜が訪れようとしていた。

「よーし、じゃあ、クジ引きの結果を発表するぞー！」

と、夕闇の中、高らかに宣言したのは生徒会長ド正義卓也である。カレーとBBQの後片付けをしていた一同の視線が集まった。

ド正義は次々と二人組の名前を読み上げていく。その場の流れで開催することになった、生徒会・番長グループ合同肝試しの組み合わせ発表である。クジは先程の夕食時に引いており、あちこちから歓声や溜息が漏れ聞こえてきた。たとえばリンドウ、夜夢などは、「香魚と組むのはオレだ!」「いや、オレだ!」などと互いに張り合っていたが、ド正義から「リンドウ君のペアは……、おっと夜夢だな。ハハハ、お前たち本当に仲が良いな!」と伝えられて、先程から二人揃って肩を落としている。

一方、その友釣香魚はといえば白金虹羽と組むことになったようだが、虹羽は興味なさげに「友釣さん、肝試しよりキャッチボールしましょうよ!」などと言ってグローブを押し付けてくるので、彼女もまた困り顔である。

また、別のところでは、ひでゆきと歩透が二人して痛切な悲鳴を上げていた。

「なんで! なんでお前なんだよ……! 何が悲しくて男二人で肝試しに挑まなきゃいけないんだよ……!」

「こっちのセリフだ、ばかやろう! 返せ! オレの青春を返せ!」

などと叫んでは、とうとう殴り合いまで始めている。昼間にはブラザーとまで呼び合っていたのに……。それを見た周りの女子たちは「昼間はちんちん丸出しでBLしてたのに……」「男の子ってふしぎ……!」などと呟いていたが、無論、彼らには聞こえていない。ところで、

「ぎゃはははは! 見ろよ、一ノ瀬! バカだなあ、あいつら! 男同士で肝試しとか! うひー!!!!」

そんな彼らを見て、涙まで流して爆笑していたのが、生徒会三年の架神恭介である。

「でも、先輩。クジならしょうがないんじゃないですか? こんなん運否天賦じゃないですか」

「おいおい。一ノ瀬、お前も甘ちゃんだなあ。こんな大イベントに運否天賦で挑むなんてどうかしてるぜ?」

「へ? ていうと、先輩は……」

「オレあ、こんなこともあろうかと、この夏休みの間中、ド正義の耳元で、やれ、女子と一緒に夏祭りに行きたいだの、肝試しがしたいだの延々言い続けてきたからな! あんだけしつこく言い続けてたんだ。オレん時にゃ便宜を図ってくれんだろ」

「そっかー! さすがっすね、先輩! なんで毎日、会長の耳元で訳分かんねえ気持ちワリィこと言ってるのかと思ってたけど、あれが全て伏線だったんすね!」

「ガハハハハ！ まあな！」

架神は自信あり気に呵々大笑する。

しかし、「あれ？ でも、会長ってそんな気が利く人だったっけな??」と一ノ瀬がふと疑問に思った瞬間、真っ黒に日焼けした巨大な剛腕が架神の後ろ襟を掴んでいた。

「おい、架神。何をボケっとしてる。お前のペアはこのオレだ。さっさと行くぞ」

へ？ とばかりに架神が振り向くと、そこには範馬慎太郎の姿が。

そして、範馬は無慈悲にも架神を引きずっていく。

「えっ！ ち、ちょっと待って！ これは、なんかの間違いだ！ おい、ド正義……！ てめー、何しらばっくれてんだ！ クソッ！ ド正義、裏切ったな、ド正義——ッ！」

あーれー、などと言いながら架神は範馬と共に暗がりの中へと消えていき、一ノ瀬屠殺彦は啞然とした表情でそれを見送っていた。

他には、一ノ瀬と怨み崎Death子がペアとなり、エースとファーマがペアとなり、駒沢とあげはがペアとなったりしていたが、服部産蔵は歪み崎絶子とペアになれたことで狂喜していた。折角の海水浴にもかかわらず、彼は結局、女子の前ではキョドってばかりで、最後の方は海辺に向かって体育座りなどしていた程の体たらくである。生徒会屈指の良識人である絶子とペアになれたことは彼の今日一番の幸運と言えよう。絶子を前にしても、彼はやはりキョドっていたが、対する絶子は落ち着いたもので、「服部先輩、よろしくお願いしますね」などと言ってニコニコしている。「絶子ちゃん、いい子だなあ……」と服部は落涙までしているが、その様子もまた気持ち悪い。

一方では、もう一人。生徒会の中に、服部産蔵にも負けじとキョドっている女子がいた。生徒会二年、女子剣道部主将の一刀両断である。憧れの白金翔一郎とペアを組むことになった彼女は、内心のドキドキを抑えられずにいた。

「よし、じゃあ、僕たちも行って来るからな。後は、白金と一刀両君。それから駒沢とあげはのペアだけだな。一刀両くん。君たちは僕たちの後、10分ほどしたらスタートだ」

そう言って、ド正義と邪賢王ペアは暗がりの山中へと進んでいく。駒沢とあげはの存在感はもとよりないようなものだから、一刀両の主観としては、今や彼女は白金翔一郎と二人きりになったようなものだった。

昼間に着ていたスクール水着の上から、Tシャツとホットパンツを穿き、ビーチサンダルをつっかけただけの軽装の彼女は、自分が憧れの先輩と暗がりに二人きりということに気づくと、突如赤面してもじもじとし始めた。

——もし、先輩が今、私を急に押し倒して……

そして、彼女は自分の真横にその白金先輩がいるというのに淫らな妄想を止められないのだ。彼女は……、

——『お前を斬り殺したい』。なんて言ってきたらどうしよう……！

……と、思っでは「きゃー」などと赤面しているのである。

同時に、彼女は昼間のスイカ割りの光景を思い出していた。白金は木刀の軽い一振りで見事にスイカを微塵に砕いていた。戯れの一撃であったが、食べるところがなくなって、みんなから白い目で見られる程に、美しい、鮮烈な一撃だった。一刀両は見事に砕けたスイカを見て、「私の頭もあんな風に砕かれるのかなあ……」などと思っではうっとりしたし、さらには「でも、私はその時にグッと懐に入って、抜き打ちざまに先輩の胴を斬りつけないなあ……」と思っでは股間をほんのり湿らせていたのである。

この一刀両断という少女が、純情可憐な恋愛をしていることは間違いない。ないが、残念ながら彼女は少し純情すぎた。彼女は恋愛というものを根本的に勘違いしていたのだ。いや、本人はこれが恋愛感情だとすら意識してないのだろう。この五月にも彼女は白金と立ち合い、肋骨を数本折られる大怪我を負ったのだが、秋までにはさらに力を付けて、今度こそどちらかが死ぬまで戦いたいと思っていたところである。

「こんな暗いところで、先輩と二人っきり……。ああ……。先輩がいきなり私を押し倒して、刀

を抜いたらどうしよう。先輩に当身を入れて、すぐに私も抜刀しないと……。先輩とならいつ斬り合いになってもいいけど……。あ、でも、やっぱりダメ……。私にも心の準備が……」

などと一人でごにょごにょ言っは、ハアハアと息を荒らげていたのだが、そんな彼女を白金は怪訝な顔で覗き込んで、

「おい、大丈夫か？ さっきから様子がおかしいが……」

「へ？ ……ひゃ、ひゃあ！！ だ、大丈夫です！ 全然大丈夫です！ ……あ、あの、私、全然、イヤじゃないです！ 先輩となら、いつ斬り合いになっても大丈夫ですから！」

「……………何を言ってるのかよく分からないが。そろそろ時間だ。行くぞ」

最後の一組、駒沢とあげは組に「10分後に来いよ」と告げて、白金と一刀両は山中へと歩き出したが、その間も一刀両のドキドキは止まらない。でも、何を話していいのかも分からずに、二人の間に沈黙が訪れる……。

「しかし、本当に真っ暗だな。肝試しコースとしては適切かもしれんが……。結局、赤螻のやつは脅かし役やってないんだよな？」

「……え。あ……赤螻先輩なら、口舌院さんとペアになってみたいですけど……」

「ああ、言葉と一緒に。なら安全だな。あいつも言葉に仕掛ける程バカじゃないだろ」

「そ、そうですね……」

せっかく白金から話しかけてくれても当たり障りの無い会話しかできない。そして、また沈黙……。本当は、もっと話したいことが色々あるのに……。一刀両は勇気のない自分を恥じていた。

だが、肝試しコースも折り返し地点に差し掛かり、彼女もこのままではいけないと思ったのだろう。彼女は勇気を出して口を開いた。

「あ、あの、先輩……。あの、良かったら私と……」

真っ赤になりながら言う。

「……また戦って頂けませんか。夏休み明けにでも……」

そして、慌てて付け足して言うのである。

「あの、私、夏も海で遊んでたわけじゃなくて……。先輩が、私と本気で戦えるように、私も強くなろうって……」

「分かってるさ」

白金は平然と、だが、優しげな口ぶりで応える。

「海の家に積まれてた薪を見たからな。すごい量だった。かなり力を付けたんだな、って思ったよ」

「は、はい……！ 私、先輩の刀ごと叩き折って、そのまま先輩の顔面を唐竹割りにしたいって思いながら、一刀一刀、先輩を斬り殺すつもりで頑張ったんです……！」

「……そうか。強くなりたいう、お前のひたむきな気持ち、オレは好きだぞ」

そう言って白金は無造作に彼女の頭をわしゃわしゃと撫でたが、その一刀両は興奮のあまり、危うく倒れそうな勢いである。「先輩に『好き』って言われた……！ 『好き』って言われちゃった……！！」と彼女は感激し、瞳も股間も濡れていた。

「そうだな。休み明け……は、まだ早いが……。学園祭の後でどうだ？」

「学園祭……ですか……？」

希望崎の第二回学園祭は11月上旬に予定されていた。

「ああ、今度の学園祭、剣道部は男女合同でメイド喫茶をやることになってただろ？」

「……服部先輩の発案でしたっけ？」

「確かそうだったな。何をやるものなのか、オレは正直良く分かってないんだが……。ともかく部内の立場もあるし、オレとお前のどちらかが欠けてたらまずいだろ？ どちらが勝つにせよ、今度は前みたく軽傷では済まないだろうし」

少女の肋骨を数本叩き折っておきながら、軽傷などと平然と言う辺り流石は白金翔一郎であるが、そんな彼も、まさか自分と一刀両が何らメイド喫茶の役に立たぬなどと、この時は知る由もなかった。

「というわけで、しばらく先の話になるが、構わないよな、一刀両？」

「あ……。は、はい……。私は、それで全然……」

本音を言えばもっと早くに斬り合いたい想いであったが、とはいえ、自分の未熟が原因で白金に本気を出してもらえなければ、それはそれで意味が無い。学園祭までにもっと練習して強くなるところと、彼女は前向きにそう思ったのだが、次の瞬間――、

「先輩……」

彼女は履いていたビーチサンダルをそっと脱いで素足で立つと、腰を落とし、『福本剣』の鯉口を切った。

「分かってる……」

見ると既に白金翔一郎も臨戦態勢であった。構えこそ取らぬものの、全方位の気配に対し、神経を張り詰めさせている。隙がない。

両者とも、先の瞬間に、周囲に潜む無数の気配を感じ取ったのである。

「……一刀両。確認するが、今回の肝試し。脅かし役はいないんだよな？」

「はい……」

「思えば妙な話だ。往復路のハズが、オレたちはもうじき折り返し地点というのに……」

「誰にも会ってませんよね……」

「敵、か……」

希望崎学園の生徒会、番長グループと言えば一般には畏怖の対象である。それは番長グループが海水浴に訪れただけで、人っ子一人いなくなるまで千葉県民が逃げ惑ったことから明らかだ。だが、中には、そんな彼らを襲って名を挙げようとする愚かな不良や魔人もいる。今回の肝試しは、暗がりの中、たった二人ずつの行動である。もしも彼らを狙うのなら絶好の機会であったに違いない。

白金は周囲に充満する気配を警戒しつつ言う。

「一刀両、気を付けろよ……。邪賢王や範馬、言葉にエースも先行してたはずだ。考えづらいが、あいつらがやられたとならば、敵はかなり腕の立つ奴らかもしれん。まさか幽霊ってことはないだろうが……」

「へ？ ゆ、幽霊……！？」

一刀両は素っ頓狂な声を上げた。自分も魔人などという超常的存在ではあるが、それはそれとして幽霊は怖いのだ。と、その時、前方で――、

がさり。

茂みが揺れた。

白金の動きは速かった。彼は木刀を手に、直ちに何者かの後を追った。

「一刀両、お前は動くな！ 背中は預けたぞ！」

「は、はい――っ！」

一刀両は抜刀の構えのまま、周囲の気配を牽制し続ける。白金を追って行こうとする敵がいれば直ちに抜き打つ気である。だが、そのような動きはなかった。周囲の気配は相変わらず彼女を取り巻き、ざわざわと不穏な雰囲気を見せていたが、彼女の間合いに踏み込もうとする気配はない。

しばらくの膠着状態が続き、次第に彼女は先に行った白金のことが心配になってくる……。彼程の技量であれば、敵が何者であれ、まず十中八九容易に討ち取れるはずである。だから、すぐに彼は戻ってくると思っていた。しかし、その後、一分が過ぎ、二分が過ぎ……。何時になっても白金は帰ってこない。彼女を取り巻く無数の気配は、やはり不穏な動きを続けたままだ。

一刀両の心中に、白金の別れ際の言葉が蘇ってきた。

『まさか幽霊ってことはないだろうが……』

——ゆ、幽霊……？

彼女はこの状況がだんだん不気味なものに思えてきた。暗い山中にたった一人……。周りには何者かの無数の気配。白金先輩は帰ってこない。真っ暗。一人。オバケ……。オバケ……。！ 相手が人間なら何人いようと『福本剣』で斬れる。でも、オバケは……。オバケに『福本剣』は効くのだろうか？ 白金先輩もどこかへ行って帰ってこない。先輩の無事も気掛かりだった。彼女の不安は募っていく。やだよう。先輩、早く帰ってきてよう……。先輩……。せんぱい……。

そして、ついに彼女は——、

「ひゃああああ！！！！！」

突如叫んで抜刀した！ 心中に膨らんだ恐怖心に彼女は屈服したのである。一刀両はうわああと泣きながら、やたらめったらに『福本剣』を振り回す！ すると、それに呼応して、辺りからも恐怖に満ちた怒号と絶叫が轟き渡る。そのあまりに痛切なる叫びに囲まれて、一刀両はさらなる恐怖に駆られ、さらに過激に！ さらにダイナミックに！ 『福本剣』を振り回した！ 周囲の絶叫もますます増大していく！

だが、その悲鳴の中に——。

かすかに、人の声が混じていたのを、一刀両はぼんやりと聞き止めていたのだ。

「うおおお！ 何やっとなじゃ一刀両は、アホかー！」

「構わん！ 範馬君、やれ！！ おもいっきりブン殴れ！」

と、その声を聞いた記憶を最後に、一刀両の意識は立ち消えていった……。

7、

「ふええん……。痛いよう。たんこぶ、痛いよう……」

マンガのようにぶっくりと膨らんだ後頭部を歪み崎絶子にさすられながら、一刀両断はぐすん、ぐすんと泣いていた。先程、範馬慎太郎のハンマーにより頭に一撃喰らった際にこしらえたものである。

「フン……！ 阿呆か、お前は。相手も確かめず『福本剣』を振り回すな。まったく、これだから女は……」

その範馬はまるで彼女をいたわる素振りもなく、むしろ御立腹の様子であったが、しかし、これは一刀両の方が悪い。危うく彼女は生徒会、番長グループの面々を皆殺しにしかねぬところだったのだから。

「だってえ……。酷いですよ。みんなして私たちを脅かそうだななんて……。ぐすん」

範馬の一撃により意識を失って後、気付けられた彼女は、そこに生徒会、番長グループの面々を見た。その中に混じって白金翔一郎も罰が悪そうに苦笑していた。

「スマンな、一刀両。オレも軽率だった。冷静に考えれば、みんなが困んでたに決まってるよな」

その皆の話によれば、こういうことであった。彼らは三々五々肝試しに出発して行ったが、先行した一部の者にはド正義と邪賢王から事前に打ち合わせがあったらしく、彼らは折り返し地点の茂みにて待機していたのだという。それから肝試しに来た者たちを順次説得し、次々に茂みの中へと誘導していったのだ。そして、予行練習も兼ねて白金と一刀両を脅かしてみたのだが、先の如く一刀両がパニックに陥って手が付けられなくなったため、範馬により気絶させたのだという。

「ま、何はともあれ、予行練習としては大成功ってトコだな。一刀両君があれだけビビったんだ。本番も巧くいくだろ」

他の者たちが、『福本剣』に追い立てられた恐怖でいまだ心臓がバクンバクン言ってる中、ド正義は何とか冷静さを取り繕ってそう言った。

「ド正義会長、さっきから言ってる、その本番ってなんなんですかー？」

相変わらず絶子にたんこぶをさすられながら、一刀両が涙目で訊く。

対して、ド正義は平然と答えた。

「そんなの決まってるだろ。あげはと駒沢だよ」

「……まったく、番長グループのやつらはともかく、なんでオレたち生徒会までが」

「まあまあ。イイじゃないすか。さっきも『福本剣』振り回されるまでは結構楽しかったし」
茂みに隠れながらも架神恭介は愚痴をこぼし、一ノ瀬がそれをなだめていた。

「まあ、そりゃ確かにな……。白金のやろーも大真面目に追っかけてきやがってよ……。うひひひひひ……。」

と、架神は先程の白金の様子を思い出しニヤニヤし始めた。一方では服部産蔵が、「せっかく……、せっかくの、女子と二人で肝試しが……。あああ、ちくしょう……。でも、駒沢とあげはちゃんのためだし……。ああ、でもやっぱり……ちくしょう……ちくしょう……」などと言っては血涙を流していたが、「先輩、帰ったら一緒にお茶しましょーねー」と歪み崎絶子に慰められている。

そんな状況を、今や脅かす側に回った一刀両も、その趣旨を理解し、納得していた。

「あげはと駒沢はどうにも煮え切らぬ感じだからな！ この機会を利用し、僕たちで後押ししてやろう！」

全てはド正義のおせっかいによるものだったのだ！ それを聞いた口舌院言葉が「面白そうね」と反応し、邪賢王や範馬までも巻き込んで、今や生徒会、番長グループ全員で彼ら二人を脅かすべく、全力でスタンバイしていたのである。

「彼女が落ち着いてくれれば、我が校の治安のためにもなるからな！ いわば、これは生徒会業務の一環なのだ！」

などとド正義はしたり顔で言うが、彼自身からも溢れる茶目っ気は隠せない。みなニヤニヤしながら楽しそうに二人を待ち受けていた。

「しかし、ちくしょう！ やぶ蚊がひでえなあ！」

「まあ、ガマンしろよ。あげはちゃんのためだかな……。！」

「それにしても遅っせえなー。あれからもう30分は経ってるってのによ」

「まあ、それだけ二人してビビってんだらう。こりゃ脅かし甲斐があるってモンだぜ。へへっ！」

そんなことを言いながら、各自、ド正義により見事に配置された指定場所にて、あげはと駒沢を脅かすべく待ち受けていたのである。いかんせん真夏の夜の山中である。やぶ蚊には刺され放題だし、窮屈な茂みの中で小さくなって腰やら肩やら痛くなるしで大変な目に遭っていたが、でも、そんな中。生徒会、番長グループの総勢60名弱は、二人の驚く顔が見たいばかりに、また、二人の幸せを祈って、一時間も二時間も苦しい姿勢に耐え続けていたのである。「まだかなー」「いい加減来いよなー」などとブツブツ呟きながらも。

だが、その頃――。

「わあ！ キレイね……」

「すごいね、あげはちゃん！」

夏の夜の潮騒と火薬の炸裂音を耳に、浜辺に座った一組の男女は、空に次々と上がる豪華な打ち上げ花火に見入っていた。二人の手は硬く繋がれている。

「これ、全部、生徒会のフジオカ先輩が一人でやってるんだってね。すごいなあ」

花火は生徒会の爆弾魔フジオカが担当していた。生徒会海の家が誇る77のサービスのうちのひとつである。

「それにしても、みんなどこに行っちゃったのかしら……」

「まあ、みんなのことなら心配ないさ。僕たちより全然強い人たちばかりだし」

「そうよね、邪賢王さんもド正義会長もいるしね」

夜空にはまだまだ花火が咲き誇っている。

「しかし、それにしても肝試しは怖かったなあ」

「うん……。途中ですごい悲鳴聞こえたよね。なんだったのかしら、あれ」

駒沢とあげはが肝試しコースに足を踏み入れてしばらくした頃、コースの先から、何十人もの恐怖に満ちた悲鳴が風に紛れて聞こえてきたのだ。あげははこれを大変恐れて、その場に立ちすくんでしまったが、駒沢は「大丈夫だよ」と彼女を励まし、自分たちを繋ぐ両手確かめさせた。『I.Z.K.』が発動している限り、彼らの存在感など霞の如くに薄れるのだ。駒沢の慰めにあげははこくりと頷き、二人して怯えながらも肝試しコースを踏破。周りには常に何者かの無数の気配を感じていたし、あげはは道中ずっと怖がって駒沢に引っ付いていたが、それでも特に何事もなく浜辺まで帰ってきたところで、フジオカの一人花火大会がスタートしたのである。

「今日は本当に楽しかったね」

「うん……！ 大好きな番長グループのみんなと、優しい生徒会のみんなと遊べて……。それに駒沢くんとずっと一緒にいられて……。あげは、今までの夏休みで、今日が一番楽しかった！」

あげはと駒沢は互いの顔を見合わせ、にっこりと微笑んで。

満天の夜空を花火が彩る中、希望崎の一年生カップルは『I.Z.K.』の中で。握った両手は互いの温もりを確かめていた。

……無数のやぶ蚊に刺され、恐ろしい様相に変わり果てた男女60名弱が山から降りてきたのは、それから二時間も後のことである。

<終>

第八次ダンゲロス・ハルマゲドン

【第八次ダンゲロス・ハルマゲドン】

- ・ 2011年5月4日現在、進行中のキャンペーン。約半年ぶりとなる本戦形式のダンゲロス。
- ・ メインGKはコバヤシ。サブGKにアルパ、とりせつ。
- ・ 2011年4月19日からキャラクター募集を開始。4月30日から作戦会議に入り、5月7日からゲーム本戦が行われる。
- ・ 新しい試みとして、参加者数を40名に限定、代表者質問制度、『転校生』は7人の中からランダムで選ばれる、などがある。

【表紙の魔人】



(イラスト：稲枝ケイジ)

日谷奴子

【性別】：女性 【学年】：1年 【所持武器】：お豆腐
攻撃：3 防御：2 体力：4 精神：6 やわっこさ：15

特殊能力名 T・T・S (豆腐を粗末にする奴は豆腐の角に頭ぶつけて死ね！)

対象をなでまわすことで、豆腐のようにやわっこいものをカッチカチにする能力。（性的な意味ではない）

やわっこいものにしか能力を使うことができないため、防御力が極端に低いキャラクターや、耳たぶなどの肉体の一部しかカチカチにすることはできない（性的な部分も含まれる）。

対象が男子の場合は、日谷が肉体の一部を触るのを嫌がるので、男子に能力を使用した場合、肉体の一部が耳なし芳一的な弱点となり、アップする防御力は落ちてしまう。「そこは自分で固くしろ！！」という罵声を日谷に浴びせられることで、対象の性癖によっては実際に解決することもある。

効果：防御力アップ+6 42

範囲：同マス味方一人 1

時間：永続 2

非消費制約：防御力2以下の対象のみ 0.85

非消費制約：対象が男性の場合防御力アップ効果-2 0.95

$$(100 - (42 * 1.0 * 2 * 0.85 * 0.95)) * (1 + 0.1 * 15) = 80\%$$

[発動率：80% 成功率100%]

キャラクター説明

豆腐屋の娘。常に豆腐と豆腐屋の笛を持ち歩き、豆腐を売っている。妖怪豆腐小僧の子孫ではないかという噂。

豆腐を粗末にするやつをこらしめるために、豆腐を固くしてぶつけるための能力を手に入れた。本人が豆腐をモノとして扱っているため、明らかに矛盾しているが、女子高生が頭に三角巾を巻いて、笛を吹き鳴らす姿は世界的に保護されるべき姿であり、誰も責めることなどできない。

ダンゲロ譜（棋譜）と解説

戦況

	1	2	3	4	5	6	7
A	江入明図	封印の壺		壁		総合名簿よん	桂珪郎
B	霧好妹	九十九				旗頭相馬	ef
C	服部あすか	破壊王 紅輝		壁		久留宮羅麵	曾野内アタル
D	女王崎金魚	夢岸徹				鳴我狂牙	闇狂
E	乙無靴音	田城寺まつみ		壁		だんげじょーぶ博士	九十九ライ夫

【スタメン解説】

番長側

総合名簿よん：ブロッカー（兼弱アタッカー）

旗頭相馬：アタッカー（兼バリア能力者）

久留宮羅麵：再行動能力者

鳴我狂牙：アタッカー

だんげじょーぶ博士：リザーバー召喚能力者

桂珪郎：ブロッカー（兼地雷化能力者）

ef：ブロッカー（兼ダメージ能力者）

曾野内アタル：アタッカー（兼ダメージ能力者）

闇狂：バランスアタッカー（兼防御ダウン能力者）

九十九ライ夫：ブロッカー

生徒会側

江入明図：壁破壊能力者（兼アタッカー）

霧好妹：アタッカー

服部あすか：移動能力者

女王崎金魚：操作能力者

乙無靴音：バランスアタッカー（兼ZOC突破能力者）

封印の壺：ブロッカー

九十九：ブロッカー（兼戦線離脱能力者）

破壊王紅輝：広範囲殲滅能力者（兼アタッカー）

夢岸徹：狙撃能力者（兼アタッカー）

円城寺まつみ：カウンター防御能力者

戦力図概観

- ・番長側は久留宮の再行動にだんげじょーぶ博士の召喚即時行動を併用することで1ターンの最大移動距離6マスを持つ（通常は2マス移動なので実に3倍の移動力！）。
- ・一方、生徒会側も服部あすかの移動補助による最大4マス移動に加え、江入の壁破壊、乙無のZOC無視による高機動力を持つ。両陣営共に機動力の高い、強襲戦の様相を呈した。
- ・その他の要素としては、生徒会側では破壊王の存在が大きい。「敵陣に辿り着きさえすれば75%で敵陣を半壊させる」能力者であり、江入の壁破壊と併せれば容易に敵陣に辿り着ける。だが、番長側にもバリア能力者の旗頭がおり、破壊王の能力を一度だけ牽制することができる。
- ・破壊王の殲滅力を旗頭で防ぎつつ、両陣営ともに高機動力をもって如何に相手に決定打を与えられるか、という点に集約されたゲームと言えよう。

1ターン目先手

	1	2	3	4	5	6	7
A	江入明 図	封印の壺		壁	桂芽郎		
B	霧好妹	九十九			総合名簿よん 旗頭相馬 ef	久留宮羅誦 鳴我狂牙	
C	服部あすか	破壊王紅輝		壁			曾野内アタル
D	女王崎金魚	夢岸徹			だんげじょーぶ博士 闇狂	九十九ライ夫	
E	乙無靴音	円城寺まつみ		壁			

曾野内：能力発動

桂：A 5

総合名簿：B 5

旗頭：B 5

ef：B 5

久留宮：B 6

鳴我：B 6

博士：D5

闇狂：D5

ライ夫：D6

【解説】

・先手を取った番長陣営は前進。夢岸の狙撃範囲に久留宮を入れることができないため、久留宮の行動範囲は制限される。

1ターン目後手

	1	2	3	4	5	6	7
A				壁	桂珠郎		
B			封印の壺 九十九		総合名簿よん 旗頭相馬 ef	久留宮羅麵 鳴我 狂牙	
C	服部あすか 江入明凶 霧好妹 女王崎金魚乙 無靴音	夢岸 徹	破壊王 紅煙	壁			曾野 内アタル
D			円城寺 まつみ		だんげじよーふ博士 闇 狂	九十九ライ夫	
E				壁			

壺 B3移動

九十九 B3移動

破壊王 C3移動

円城寺 D3移動 能力発動

夢岸 C2移動

江入 C1移動

霧好 C1移動

女王崎 C1移動

乙無 C1移動

服部 その場で能力発動 江入をβに

【解説】

- ・後手の生徒会側は破壊王をデコイ（囷）に用いる戦術。破壊王をC3に配置すれば、相手は旗頭を使って防御するか（旗頭が行動不能になる）、もしくは久留宮かだんげじょーぶを使って討ち取るしかない。
- ・生徒会側の事前のシミュレーションによれば、破壊王を討ち取るために相手が久留宮かだんげじょーぶを使えば（歯車川を召喚）、破壊王が倒されても有利という計算であった。
- ・そのために円城寺をD3に置いて能力発動。「謎のカウンターが掛かっているならば、相手はびびってDラインからは攻めてこれまい」という目論見。
- ・一方、B3には封印の壺、九十九のブロッカー二枚を配置。この二人のZOCを抜けさせるために相手に久留宮の再行動を使わせるのが狙い。
- ・服部はC1にて能力発動。次ターン以降の4マス移動を準備し、機動力を確保する。

2ターン目先手

	1	2	3	4	5	6	7
A				壁			
B			封印の壺 九十九	久留宮羅麵 鳴我狂 牙 総合名簿よん 旗頭相馬 ef 桂珠郎	闇狂		
C	服部あすか 江入 明 霧好妹 女王 崎金魚 乙無靴音	夢岸 徹	愛原豚姫	壁			曾野 凶アタル
D			円城寺まつみ だんげじょーぶ博士	九十九ライ夫			
E				壁			

桂：B4

総合名簿：B4

ef：B4

久留宮：B4

鳴我：B4

旗頭：B4 能力使用（ボーナス10使用）

博士：D3 能力使用豚姫召喚

闇狂：B5

ライ夫：D4

豚姫：C3 破壊王を攻撃

【解説】

・だが、生徒会の目論見も虚しく、相手は円城寺を恐れずDラインから侵攻。さらに生徒会側の盲点であった「愛原豚姫（アタッカー）」を召喚し、最小の損失で破壊王を討ち取る。「1対3」交換のはずが「1対2」交換になってしまった。

・番長側強襲作戦の要、羅麵はB4で仲間と共に旗頭の防御能力に護られる。夢岸の狙撃能力は通じない。

・しかし、相手がB4、すなわち服部の移動範囲に固まったのは生徒会にとっては幸運であった。

・DP差：番長（1）-生徒会（0）

2ターン目後手

	1	2	3	4	5	6	7
A				壁			
B			九十九	霧好妹 乙無靴音 総合名 篠よん 旗頭相馬 ef桂 珪郎	闇狂		
C			夢岸徹 女王崎金魚 服部あすか 江入明 図	壁			曾野内 アタル
D			封印の壺 円城寺ま つみ だんげじょーぶ 博士	九十九ライ夫			
E				壁			

江入：C3移動

女性陣いんも一たるα解除

霧好：B4に移動 鳴牙に通常攻撃

乙無：B4に移動 久留宮に通常攻撃

女王崎：C3で待機

夢岸：C3に移動 豚姫に通常攻撃

封印の壺：D3に移動

九十九：待機

【解説】

・C1で強襲準備をしていた生徒会メンバーが4マス移動を駆使し、B4の番長陣営に襲いかかる。とはいえ、B4にいる相手に能力は通じない。殴り込めるのは通常攻撃で敵を倒せる霧好

、乙無の両名に限られた。

・霧好が鳴我を、乙無が久留宮を討ち取る。久留宮を倒したことで番長側の移動力・瞬間最大火力は大幅に減少。また、乙無はリーダーだったのでDP（ダンゲロスポイント）は倍の2DPを獲得。

・DP稼ぎのために夢岸が愛原を討ち取った。

・DP差：番長（1）-生徒会（4）

3ターン目先手

	1	2	3	4	5	6	7
A				壁			大剣月讀
B			九十九	霧好妹 総合名簿よん 旗頭相馬 ef桂珠郎 閻狂			曾野内アタル
C			夢岸徹 女王崎金魚 服部あすか 江入明 図	壁			
D			封印の壺 円城寺まつみ だんげじょーぶ博士	九十九ライ夫			
E				壁			

増援出現位置：A 7

桂：その場で能力使用（ボーナス7使用）

閻狂：B 4 移動 乙無に攻撃

総合名簿：霧好を攻撃

ef：乙無に能力使用（ボーナス10使用）

曾野内：B 7 移動

【解説】

・増援でランダム登場したのは大剣月讀。今回の戦いではほぼ意味のない能力者で、番長側にとっては残念な増援キャラとなった。

・番長側は閻狂、efの攻撃で生徒会のリーダー乙無を落とす。リーダーが敵リーダーを倒したため、獲得DPは倍の倍で4DP。DP差を取り戻す。

・しかし、総合名簿よんの攻撃はハズレ。霧好は生き残った。

・桂は能力使用し地雷化する。以降、桂と同マスで行動終了した生徒会メンバーは精神値次第で死亡することになった。

・DP差：番長（5）-生徒会（4）

3ターン目後手

	1	2	3	4	5	6	7
A				壁			大剣月 譚
B		ペン 3	封印の壺	総合名簿よん 旗頭相 馬 ef 江入明図			曾野内 アタル
C			夢岸徹 女王崎金 魚 霧好妹	壁			
D			円城寺まつみ	九十九ライ夫			
E				壁			

ペン3：B2に出現

九十九：B4移動、桂に能力使用

夢岸：服部に通常攻撃

霧好妹：C3移動

江入：B4移動、闇狂に通常攻撃

円城寺：だんげじょーぶに通常攻撃

女王崎：待機

封印の壺：B3移動、能力使用

【解説】

・生徒会側増援はペン3。能力は使えないがアタッカーとしては優秀なユニットで、運の良い増援と言えた。

・九十九（敵と自分が同時に戦線離脱）は本来efを道連れに消えるはずだったが、桂の影響力が無視できないと判断。標的を変えて桂と共に消え去った。

・続いて、生徒会の江入が番長側の闇狂を討ち取る。これで番長側の実質的な攻撃力はefと総合名簿よんだけに限られた。旗頭は能力使用により行動不能となっており、曾野内は夢岸に牽制されて動けない。

・転校生に「天」のちびっ子殺害機械Vが来た場合、大剣が能力使用可能になってしまうため、万一に備え「封印の壺」が能力発動。これで転校生登場による「紛れ」を抑えた。

・円城寺はだんげじょーぶ博士を討ち取り、DPを稼いでおく。

・DP差：番長（5）-生徒会（6）

3 ターン目転校生登場

	1	2	3	4	5	6	7
A				壁			大剣月讀
B	鳴神雷鳥	ペン3	封印の壺	総合名簿よん 旗頭相馬 ef 江入明図			曾野内アタル
C			夢岸徹 女王崎金魚 霧好妹	壁			
D			巴城寺まつみ	九十九ライ夫			
E				壁			

B1に転校生：鳴神雷鳥が出現 ターゲットはペン3に

【解説】

- ・封印の壺の能力効果により、登場する転校生は7種類のうち4種類が封じられ、結局、登場したのは「雷」の鳴神雷鳥であった。雷鳥は残り3種の転校生の中では、もっとも盤面に及ぼす影響が大きいと見られる転校生である。
- ・その雷鳥は現れたばかりのペン3をターゲットに設定。両者の位置関係からして、ペン3は回避不能である。
- ・DP差：番長（5）-生徒会（6）

4 ターン目先手

	1	2	3	4	5	6	7
A				壁			大剣月讀
B	鳴神雷鳥	ペン3	封印の壺	旗頭相馬 ef 江入明図		総合名簿よん	曾野内アタル 悪鬼侍屋 Sucie
C			夢岸徹 女王崎金魚 霧好妹	壁			
D			巴城寺まつみ		九十九ライ夫		
E				壁			

増援登場位置：B 7

総合名簿：B 6 移動

ライ夫：D 5 移動

D P 差：番長（5）-生徒会（6）

【解説】

- ・番長陣営、二人目の増援は悪鬼悖屋Sucie。アタッカーを三名も召喚する能力者である。使い勝手はあまり良くなく発動率も不安が残るが、劣勢を覆せる可能性を持つ幸運な増援と言えた。
- ・番長側はBライン寄りに布陣し、悪鬼悖屋Sucieの召喚アタッカーを活かせる形を作る。

4ターン目後手

	1	2	3	4	5	6	7
A				壁			大剣月讀
B	鳴神 雷鳥		封印の壺	旗頭 相馬 ef		総合名 簿よん	曾野内アタル 悪鬼悖屋Sucie
C	ぺん 3		公文崎学 夢岸徹 女王 崎金魚 霧好妹 江入明 図	壁			
D			円城寺まつみ		九土 九ライ 去		
E				壁			

公文崎：C3出現

ぺん3 C1に移動

霧好 待機

江入 C3に移動

夢岸 待機

女王崎 待機

円城寺 待機

壺 休み

D P 差：番長（5）-生徒会（6）

【解説】

- ・だが、ここで生徒会にとっては大ラッキー。現れた増援は公文崎学。敵陣営に未だ残る脅威、efを確実に消し去れる強キャラである。

・ペン3はC1に移動。雷鳥を誘導。efを確殺できる現状、生徒会にとって最悪の展開は雷鳥が番長側に討ち取られることであるが、それを防ぐため自陣最奥に誘導することとなった。さらに次ターン、女王崎で雷鳥を操作する目論見もある。

4ターン目転校生

	1	2	3	4	5	6	7
A				壁			大剣月讀
B			封印の壺	旗頭 相馬 e f		総合名 簿よん	曾野内アタル 悪鬼悖屋 Sucie
C	鳴神 雷鳥		公文崎学 夢岸徹 女王 崎金魚 霧好妹 江入明 図	壁			
D			巴城寺まつみ		九士 九ライ 去		
E				壁			

雷鳥 C1移動 ペン3に攻撃

【解説】

- ・生徒会側の予定通り、雷鳥がペン3を攻撃。
- ・次のターゲットは番長側の悪鬼悖屋Sucie。
- ・DP差：番長（5）-生徒会（6）

5ターン目先手

	1	2	3	4	5	6	7
A				壁			大剣月讀
B			封印の壺 ef	旗頭 相馬		総合名 簿よん	曾野内アタル 悪鬼悖屋 Sucie チームS1 チームK チームS2
C	鳴神 雷鳥		公文崎学 夢岸徹 女王 崎金魚 霧好妹 江入明 図	壁			
D			巴城寺まつみ				
E				壁		九士 九ライ 去	

ef : B 3 移動

Sucie : その場で能力発動 (応援ボーナス10)

ライ夫 : E 6

【解説】

- ・ efは公文崎の攻撃を逃げ切れない。下手に下がればライ夫、総合名簿も公文崎の能力に巻き込まれることになる。efは仕方なく前進。
- ・ 悪鬼悖屋Sucieはアタッカー3名の召喚に成功。
- ・ DP差 : 番長 (5) - 生徒会 (6)

5 ターン目後手

	1	2	3	4	5	6	7
A				壁			太剣月讀
B				旗頭 相馬		総合 名簿よ ん	曾野内アタル 悪鬼悖 屋Sucie チームS1 チー ムK チームS2
C	鳴神雷鳥 女王崎金 魚			壁			
D			円城寺まつみ 夢岸 徹 霧好妹 江入明 封印の壺				
E				壁		九十 九ライ 夫	

公文崎 : B2で能力使用

女王崎 : C1移動、鳴神に能力使用 (応援ボーナス8) 「命令は”おすわり”」 鳴神は次の行動で移動せずその場で待機

封印の壺 : D3移動

夢岸 : D3移動

霧好 : D3移動

江入 : D3移動

円城寺 : 待機

鳴神 雷鳥：その場で待機

【解説】

- ・公文崎がefと共に消え去る。これで番長側の実質的攻撃力は総合名簿よんのみとなり、生徒会側を討つことは不可能となった。
- ・さらに女王崎が雷鳥の操作に成功。雷鳥を手元で飼い殺しにする。転校生により盤面がかき乱される危険性もほぼなくなった。
- ・DP差：番長（5）-生徒会（6）

6ターン目先手

	1	2	3	4	5	6	7
A				壁			
B				雷真 米ツト	あや まだS 1		刃葉破 単箭 あやまだ あやまだK あやまだS2
C	とりせ つENT			壁			
D			鳩子ももじ 今日 知ろう 白金 ふきゅ う				
E				壁		宇如	

大剣：B7に移動

チームS1：B5に移動して総合名簿よんを触手レイプ

総合名簿よん：B4移動して「らめえええええええええ」と喘ぎながら能力発動

S K Sたちは、全ての触手の祖『たびびと』となった！

ライ夫：能力使用 チームS2のたびびとさんたちを女性化

チームKのたびびとさんたち：チームS2のたびびとさんたちをレイプ

「はあん！ やったあん！ ついに触手を味わうことができた……！
あはっ、これが触手の味なのね！ 今まで私が信じてきたことは正しかったんだ！
もはや悔いはないわ！ もっと！ もっと奥まで……！」

【投了】

【解説】

・ 6ターン目先手にて番長側投了。なお、図中の名称が変化したのは、総合名簿よんの能力によりキャラクター名がプレイヤー名に置き換わったためである。

【結果】

勝利チーム：生徒会

総合MVP：稲枝ケイジ

生徒会MVP：【期待のルーキー】夢岸徹

番長グループMVP：稲枝ケイジ

(文責：架神恭介)

月刊ダンゲロス #01 (2011年5月号)

<http://p.booklog.jp/book/25490>

「月刊ダンゲロス」は、主にpixivにてアップロードされた
二次創作小説、イラストを元に編集、創作されます。

今後、pixivにアップロードされた著作者様に
ご連絡させて頂くことがあるかもしれません。

よろしければご協力お願いいたします。

本文：架神恭介、こう、momoji

イラスト：稲枝ケイジ、みや、今日知ろう、es、大塚零、ε

編集：架神恭介

発行所：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25490>

ブックログのパー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25490>